
Starry site

橘 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S t a r r y s i t e

【Nコード】

N 6 8 4 4 S

【作者名】

橘 潤

【あらすじ】

「星降る地にて」を書き直したものです。

あらすじはまだ決めてません。

プロローグ

辺り一面、赤一色。

町は炎に包まれ、そこに住んでいた人々は無残な姿となって地面を多い尽くしている。魔物が町を徘徊し、犬や狼の遠吠えが響き渡る。

全身をフードの付いたロングコートで隠している男女が、魔物に命令を出していた。男の手には漆黒の大剣。女性の手には見た目は普通の杖。二人は何かを探しているようだった。

そんな二人の様子を物陰から窺う蒼髪の男性と、銀髪の女の子を守るように抱きしめている銀髪の女性。女の子は目の前で人が死んでいく様を見て、気絶している。このまま隠れていても埒が明かないと、女性に何かを囁いて、物陰から飛び出す。

男女は男性に何かを要求しているようだが、男性は叫び、両腕に剣の形をした氷を纏う。腰を落として足に力を溜め、地面を強く蹴って男に斬りかかる。速いが、直線的な行動に、男は一步横にずれる事で躲す。男性はそれを予測していたのか、右足を軸に回転し、横薙ぎを放つ。男は大剣を盾にして防ぐも、男性の縦、横、袈裟、突き、斬り上げを防ぎきれなくなり、数メートル後退する。追撃を仕掛けようと、男性は思うが、横から迫る火球をバックステップで回避。その間に男は大剣を構えなおす。戦況は男性が圧倒的に不利。一対一でも勝てるかどうか。それほどまでに、互いの実力は拮抗していた。だが、これは二対一。少しでも気を抜けば一瞬で殺される。

その時、男性が飛び出した物陰から一筋の白い光が立ち昇った。光が収まり、物陰から女性が姿を現す。女の子は彼女の腕の中にも物陰にもいない。彼女の瞳から涙が零れた。それには別れと言う悲しい感情が含まれている。女性は涙を服の袖で拭い、気持ちを切り替えて自分の得物を構える。黒い杖。彼女の姿とは対照的な色。

彼女が杖で軽く大地を叩くと、先ほどまでの空気が一変し、風が

吹き荒れる。男女はすぐにその場から飛び退いた。直後、何かに押し潰されるように大地が窪む。女が女性に向けて火球を放つが、先と同じように杖で大地を軽く叩くと女性の目の前で消える。まるで見えない壁があるかのように。

さっきまでの戦況は男性が圧倒的に不利だった。だが、女性が加わった事でどうなるか分からなくなった。

男は一気に男性の目の前まで移動し、大剣を振り下ろす。ギリギリの所で氷の壁が剣と男性の間にでき、一瞬だが大剣を防いだ。その隙に男性は後ろに飛び退く。そこに火球が迫るが、杖が地面を叩く音と共に消える。まるで、あなたの相手は私だよ——とでも言うてるのか、杖を女性に向ける。

男と男性は何十合も切り結び、ぶつかる度に地が削れ、女は巨大な火球を作って放つも、女性が杖で地面を叩くと同時に消える。

先に疲れの色が見えたのは蒼髪の男性と銀髪の女性。二人とも肩で息をしている。男性は男の袈裟斬りを左腕で防ぐも、纏わせていた氷の剣はガラスの様に砕け、男性の左腕が落ちる。男は更に下段から大剣を振り上げ、男性を斬り飛ばす。

女性は黒い魔力弾で女を攻撃するも、火球で相殺される。お互いにダメージは一切負っていないかったが、とうとう女性がよろけた。女はそこに火球を何十発も放ち、焼き払った。

二人は殺られる直前、ごめん、と小さく、呟いていた。二人の体は光の粒子となって空を舞う。

男女は用が済んだのか、闇に溶けるように消えた。
直後、不思議な声が響き渡る。

——目覚めたまえ、破滅の女神よ。

朝。窓から日差しが射し込み、室内を明るくする。小鳥の鳴き声

が聞こえ、ベッドの上で規則正しい寝息を立てていた、肩に付くくらい銀髪の少女、花咲睡蓮は目を覚ます。眠たげに目を擦り、短く伸びをする。

ベッドから下りて、階下にある洗面所に向かう。顔を洗って歯を磨き、寝癖を整えて部屋に戻る。寝巻きから中学校の制服に着替え、家族の集まるダイニングに向かう。キッチンでは義母である銀髪の女性、神藤悠美が朝食を作っている。

「おはよう、お義母さん。お義父さん達は？」

睡蓮の質問に悠美は朝食を作る手を止めずに対応する。

「おはよう、睡蓮。お父さん達はいつもどおり早朝トレーニングで走ってるわ。まだ雫が寝てるみたいだから起こしてきてくれる？」

「わかった」

階段を上り、自分の部屋の隣、神藤雫の部屋の扉を三回ノックする。

「雫ちゃん、起きてる？」

返事がない。扉を開けて中を確認する。布団の中で、規則正しい寝息を立てている銀髪の少女にゆっくりと近づき、体を揺する。

「雫ちゃん起きて、朝だよ」

「ん〜…あと五分……」

全く起きる気配がない雫に対し、睡蓮は小さくため息を吐いて掛け布団の端を掴む。少し息を吐き、思いっきり引っ張る。

「起きて！」

掛け布団を剥ぎ取るが、それでも雫は起きない。腰まである長い銀髪が掛け布団を剥ぎ取ったさいに舞い、カーテンの隙間から射し込む日差しを受け、キラキラと輝いている。

掛け布団をベッドの下に置き、窓に近づいてカーテンを開ける。僅かに射し込んでいた日差しが、カーテンが全開になった事で部屋全体を明るくする。突然の事に、雫は目を強く瞑り、ゆっくりと上体を起こす。眠たげに目を擦りながら、目を少しだけ開け、睡蓮の姿をそのオッドアイの瞳に映す。

「おはよう…睡蓮」

「雫ちゃん、おはよう」

顔を見合わせて挨拶をする。睡蓮が窓の外に視線をやると、義父の神藤一哉と義兄の恭弥、義姉の瑠璃が玄関口に帰ってきた。

「お義父さん、お義兄ちゃん、お義姉ちゃん、おはよう」

「おはよう、睡蓮」

「おはよう。雫を起こしてたのか？」

「うん」

窓を開けて三人に挨拶をする。三人は睡蓮の顔を見つけると笑顔で挨拶を返す。一哉は睡蓮に雫の部屋に居る理由を聞き、その返事を聞いた一哉は小さくため息を吐く。そろそろ自分で起きれるようになってほしい、と思いながらも口には出さない。

「それじゃあ、お義母さんのお手伝いしに行くから、二度寝しないで準備してよ」

「わかった」

窓を閉め、雫の顔を見て言う。二人は誕生日が一緒でどっちが義姉でどっちが義妹なのか分からなく、小さい頃はよく喧嘩をしていた。いまでは誰が見ても睡蓮を姉と言うだろう。

部屋を出て階段を下りる。キッチンに向かう途中に、風呂場からシャワーの音が聞こえる。早朝トレーニングでかいた汗を流すために瑠璃が入っているのだろう。今は七時だから十分時間がある。

「お義母さん、起こしてきたよ」

「ありがとう、睡蓮。これをテーブルの上に並べてくれる？」

「わかった」

悠美から料理を盛りつけたお皿を受け取り、食卓に並べる。席にはすでに一哉と恭弥が座っている。汗臭くないからすでに汗を流したのだろう。六人家族だから準備に手間がかかり、一人で全部やるには少し時間が掛かる。朝食の準備が整ったところで瑠璃と雫が来た。

「おはよう、お母さん、お父さん、お兄ちゃん」

「おはよう、雫」

全員、いつもの席に座る。

「いただきます」

家族が全員揃ったところで朝食を食べ始める。恭弥の表情が暗いが、家族にとってはいつもの事だから気にしていない。

「ごちそうさま」

食器を流しに置いて子ども達は学校に行く準備を始める。必要な教科書とノートを鞆にしまつて持ち、階段を下りた。

「行つてきまーす」

「いつてらっしゃい」

四人一緒に家を出る。ぼかぼか陽気が気持ちよく、眠気を誘う。朝が苦手な雫は今にも眠りそうな顔をしている。これもいつもの事なのか、気にしていない。

ふと、何かに気付いたのか恭弥は半歩右にずれた。すると、さっきまで恭弥が居た所を拳が通り過ぎる。

「はあゝ…」

深くため息を吐いて、攻撃してきた人を見る。

「避けんな、恭弥！」

「無茶言つんじゃねえよ、零次！」

恭弥と来栖零次の言い争いを見て、睡蓮達は深く、ため息を吐く。今朝、恭弥の表情が暗かった理由はこれだ。

次第に、言い争いが殴り合いのけんかになる。

恭弥の顔面を狙った零次の拳を屈んで避け、鳩尾を思いっきり殴る。

「うつ！」

「はい、俺の勝ち」

綺麗に決まった攻撃。お腹を抱えて蹲る。恭弥をキツ、と睨みつ

け、右足を振り上げる。軽く反る事で躲し、右足を軸に後ろ回し蹴りを零次の脇腹に決める。足が地面から離れ、壁にぶつかる。

「みんな、おはよー」

「おはよう、みんな」

「弓束ちゃん、凜さん、おはよう」

「おはよう、弓束、凜」

綾乃弓束と月影凜が睡蓮達に近づき、挨拶する。気絶している零次を一回見て、なかったものとして睡蓮達と普通に接する。

「早く学校行こう」

「うん」

誰も気に掛けず、零次を置いてけぼりにする。十分後に目が覚めた零次は、道行く人に痛い目で見られていた。

夕日が射し込む私立の小学校。静かな校舎の廊下を歩いている一人の男の子。制服は土で汚れ、手足からは血が出ている。顔にも擦り傷があり、目には涙が溜まっている。悔しさに歯を食いしばり、拳を握って壁を思いっきり叩く。刹那、拳が光り、壁は轟音と共に吹き飛んだ。

「っ!？」

目の前で起きた現象に驚き、息を呑む。

もう一度拳を握り、壁を叩く。だが、何も起こらず、腕に激痛が奔る。皮膚が裂け、拳から血が飛び散った。

「はは……」

馬鹿らしい。そう思うと、笑いが止まらない。力なく腕を下ろし、壁がなくなつてハッキリと見える外を眺める。少し離れた所の道には、男の子の恨んでる相手が友達と仲良く下校している。壁が吹き飛んだ時の轟音を聞いたのか、たくさんの人が男の子の事を見ている。

その光景を見て、再び狂つたように笑い始める。

力が欲しい。全てを壊す力が——その思いに反応したのか、彼の脳に直接誰かが話しかける。

——力が欲しいか？——

突然の事に一瞬驚き、笑いが止まるも、すぐに狂つたように笑い始める。

「……欲しい…復讐する力が、全てを壊す力が………」

——ならば、黒い糸を辿れ。その先にお前の望む力がある——

言われたとおり、壁のない場所から宙へと伸びる黒い糸を辿る。空中を歩く男の子を見て、人々の表情が固まる。男の子はその光景を、不気味な笑みを浮かべて見ていた。

来栖家の敷地内にある道場。もうじき夜の十一時を回ると言うのに、灯りが点いている。

零次は目を閉じ、周りに何かが居るかのように木刀を振り回し、時に蹴りや掌底をし、最後に木刀を横に一閃して止まる。

「零次、まだやってたのか」

零次は声の主、兄である流斗を気にせず、一度姿勢を解いて再び構える。

「おいおい、無視は傷つくなあ。せつかく一戦、交えようと思ったのに」

振り上げた腕が止まる。姿勢を解き、流斗を見て、長さの違う二本の木刀を投げ渡す。右手に普通の長さの木刀を、左手に短い木刀、小太刀を持って、零次を見る。

「はあ…相変わらず反応が薄いな。何で俺にだけ、そんな態度なんだ？」

「手前が嫌いだからだ。どんなに努力しても、お前には勝てない。いつも手を抜いてるお前に……それが気に食わない」

静かに、今朝とは違って冷たい声で発する。道場の空気が冷え、窓ガラスは曇っている。

木刀の切先を流斗に向け、一気に間合いを詰める。逆袈裟に振られた木刀を受け流し、小太刀を突き出す。当たる直前で零次は消え、背後から袈裟懸けに木刀を振り下ろす。流斗はすぐさま身を反転、勢いを殺さずに小太刀を横薙ぎに振るう事で防ぎ、隙だらけの零次に木刀を下段から振り上げようとするが、すぐに後退する。さつきまで流斗の居た場所、鳩尾部分に零次が掌底を放っていた。

零次は再び距離を詰め、連続で刺突を放つ。流斗は小太刀を使い、

軌道を少しずらして最小限の動きで躲し、一瞬の隙を突いて木刀で弾き上げ、小太刀で斬りかかる。弾かれた勢いで重心が後ろにずれたのを利用し、バク転して躲すと、屈んで刺突の構えをとる。

地をおもいつき蹴り、間合いに入ったところで木刀を突き出す。流斗は木刀と小太刀を交差させて防ぐが、あまりの勢いに半歩後退するも踏ん張り、左足を軸に後ろ回し蹴りを放つ。零次はそれを突き出した木刀を床に叩きつけ、棒高跳びのように跳び上がって避け、距離をとる。

「少しはやるようになったな」

「誉められても…嬉しくねえんだよ!」

距離を詰め、上段から振り下ろす。流斗は木刀で受け止め、小太刀を叩き込もうとするが、それより早く零次の膝蹴りが決まる。

「くっ…!」

肺に溜まった空気が少し吐き出され、蹲る。直後、頭上から殺気を感じ、そのままの体勢で前転する。木刀が流斗の居た場所に突き刺さる。

「今のは殺す気だったろ」

「そうでもしねえと、手前には勝てねえからな」

「よく…分かってんじゃない!」

一瞬で零次の目の前に移動し、木刀を横に振り、薙ぎ払う。木刀を盾にして防ぐが、零次の足が地から離れ、壁に激突する。

「終わりだ」

そう言って、木刀を零次の首に当てる。

「……………ねえよ……………」

「ん？」

「まだ…終わってねえ！」

零次の体から黒い魔力が吹き出し、流斗を反対側の壁まで吹き飛ばす。

「アンチモード・リミットブレイク……」

黒い魔力が、零次を飲み込んだ。

t o b e c o n t i n u e d

プロローグ―2

肌は褐色に、髪は白く、白目は黒に、スカイブルーの瞳は黄色になる。

「チツ…リミットリリース」

流斗の身体から溢れ出した魔力が大気を震わせ、風が吹き荒れる。風圧に耐えられなくなった窓ガラスは砕け、ドアは吹き飛ぶ。気温が急激に下がり、二人の息が白くなる。二人を巨大な氷の球体が呑みこむ。零次の手には漆黒の、流斗の手には氷でできた、自身の身長の1・5倍はある、両刃の大剣が握られている。

「黒剣・深淵…」
アビス

「氷剣・ラグラス。使うつもりは無かったけど、今のお前を止めるには仕方ねえか」

互いに距離を詰め、剣を振るう。黒剣は黒い、氷剣は反射した光の軌跡を描き、刃が触れると火花が散り、床や壁に亀裂が入る。一旦距離をとり、再び詰める。何十合も切り結び、道場は見るも無残な姿になっていく。

互いに掠り傷はあるものの、大きな傷は一切見当たらない。零次の髪はさつきと比べてかなり伸び、褐色の肌は一部が黒く染まっている。

流斗は肩で息をしている零次を見て、自我を保ってられるのも限界か、と思っていた。そのことには零次自身、気が付いていた。意識が持っていかれそうで、集中が切れかけている。

二人は声に出さず、心の中で次の攻撃に余ってる力全てを乗せる

！——と決断し、零次は正眼に、流斗は腰溜めに得物を構える。

長い沈黙。先にそれを破ったのは零次の地面を蹴る音。一定の距離まで詰め、高く跳び上がって大剣を振り下ろし、それに合わせて流斗も得物を振り抜く。衝突した二つの大剣は轟音を響かせ、氷の壁に罅が入る。零次の剣からミシミシ、と嫌な音がした時、刃が折れて氷の壁に叩きつけられる。

壁にぶつかった衝撃で気を失った零次は、姿が元に戻ってその場に倒れこむ。氷の壁が砕けると、道場は壊れる前の姿になっていた。流斗は外で気絶している零次を抱え、道場の中に寝かせる。漆黒の空に散りばめられた星。すでに日が昇りかけてるのか、東の空は少し蒼くなっている。

日が完全に昇り、外が明るくなった。目を覚ました零次は道場の柱に掛けてある時計を見る。九時十五分。視線を時計から天井に移す。

「また、負けた……」

呟くように発せられた言葉。腕で目を隠し、表情が歪む。目指す相手がずっと高い所に居て、その何倍も努力してるのに勝てなくて、それが悔しくて涙が零れる。目指す相手は、「自分よりもお前の方が才能がある」と言った。だったら何で勝てないんだよ。その答えも聞いたような気がして、記憶を探る。何度も行ったやり取り。同じ答えを何度も言っていた。

「『まだ、その時じゃない』か……」

思い出した答え。だが、それはちゃんとした答えではない。

いつになったらその時が来るんだ？ その時って何なんだ？——
考えても分かるはずのない問題。だんだん、怒りが込み上げてくる。
圧倒的な力が欲しい。誰にも負けない、最強の力が……！——

——欲しいならばやろう——

急に聞こえた知らない声に驚く事もなく、声の主に聞き返す。

「本当なんだな？」

——もちろんさ。まあ、誰にも負けないってのは無理だが——

「どうしてだ」

——王よりも強くなれると、我々の計画が台無しになるかもしれないからだ——

「なら、仕方ねえか。それで、条件は何だ？ 何も無しで力をくれるわけじゃないだろ？」

——先日の小僧より頭が良いようだな。なに、簡単な事だ。我々の計画に力を貸してくれればいい——

とんでもない目的かもしれない。そう考えたが、力が手に入るならそれでいいと、気にするのをやめる。

「わかった」

——目の前に黒い糸が見えるだろ。それを辿れば我々の所に着く

零次の視線の先は天井。黒い糸は視界の中心にあり、天井よりも先に続いているようだ。

「飛んで行けって事か」

掌に氷の球体を作り、天井に向けて放つ。背中に黒く淀んだ氷の翼を生やし、天井に開けた穴から飛び出す。黒い糸の先は青空ではなく真黒で、まるで底の知れない沼の様だ。その周りは綺麗な青空。下を見れば、穴のある部分だけ黒くなっている。急に空が暗くなつた事を不審に思った人たちは、空を見上げて固まっている。

零次は気付かれて写真を撮られる前に、ペースを上げて穴の中に入って行った。それと同時に穴は消え、空は元の青空に変わる。

夕方。来栖、神藤、月影家は綾乃家に居た。大勢の人が集まるには広い場所、できれば家の方がいい。それには綾乃家がピッタリだった。大人組みは広間、子ども組みは弓束の部屋に移動。流斗は高校二年生だが、事の原因は自分にある——と言う事で大人組みに混じっている。

子ども組みはいつものメンバーから零次が抜けている状態。みんな、何か物足りない気がして俯いている。

こういう時にいつも場を明るくさせていたのは零次だった。恭弥に、どこから取り出したのか分からない短刀で切りかかって返り討ちにあう。いつもの事のようにだけど、そういう時だけテンションがかなり高く、意味不明な言動になる。

後からその事を思い出し、顔を赤くする零次を弄って更に、場が明るくなる。だけど、今は居ない。もしかしたら一生居ないのかもしれない——そう考えると、どんどん表情が暗くなっていく。

「あゝ！ 湿っぽいのはやめだ！」

恭弥は頭を乱暴に掻いて顔を上げる。さつきまで暗かった表情が一転して、決意を固めたような表情をしている。

「瑠璃、みんなにアレを教えるぞ」

「
い
い
の
？」
」

「それ以外にこの空気を変える方法が思いつかない。それに……」

みんなの顔を左から順に見る。何を言うのか気になっているみたいだ。

[illegible]

続きを言おうとするが、ノック音に遮られる。恭弥の表情が恐怖に支配される。身体に突き刺さる殺気。その場に居た全員が冷や汗を流し、硬直している。

—コン—

五回目のノック音。直後、凄い音と共にドアが反対側の壁にぶつかり、砕け散る。今の出来事で現実に引き戻された恭弥は辺りを見る。みんなの顔は未だに恐怖に支配されている。ともに動けるのは自分だけか———と思ひ、殺気を放っている人物を見る。見た目は中年の男性。だが、その身に纏う禍々しい黒い霧は異常だ。

一回、深呼吸をして気持ちを落ち着ける。男を見据えて、決意したのか右手を前に出す。

「炎刀・焰」

炎が刀の形になり、柄を握って袈裟に振る。炎は斬撃となって男性に向かう。男性は臆する事無く、右手で軽く払う。それだけで斬撃は消えた。圧倒的な力の差に絶望しかけるが、敵の目的が大体分かっているから諦めるわけにもいかない。腰を落として刀を下段に構える。床を蹴ると同時に足の裏が爆発し、勢いが増す。すれ違いざまに切りつけようとするが、片手で止められてしまう。その時に発生した爆発も大して効いていないようだ。

「風爆・乱舞！」

至近距離で大量の風弾を浴びせる。爆発はどんどん大きくなり、恭弥も呑み込む。その光景を少し遅れて意識が現実に戻された睡蓮達は、目の前で起きていることが理解できず、見ている事しかできなかった。

「兄貴！」

いち早く現状を理解した瑠璃が叫ぶ。爆煙の中から飛び出てきた恭弥の服や身体は汚れているが、外傷はない。瑠璃は深く息を吐き、爆煙の中を睨みつける。爆煙が少しずつ晴れていき、影が薄っすらと見える。

「エア・ムーブ」

風船が破裂した時のような音と共に瑠璃は男性に向かって駆ける。両掌に空気を集め、男性に押し当てる。先と同じ破裂音と共に、男性の身体が半歩さがる。右足を軸に左足の膝に空気を集めて飛び

膝蹴り。ギリギリ当たっていない位置で集めた空気を放出し、男性を吹き飛ばした直後、その勢いを使って空中で回し蹴りを放つ。もろに食らった男性は吹き飛び、部屋の壁を突き破って再び姿が見えなくなる。

「瑠璃、大丈夫か？」

「あいつの身体硬すぎ。わざと攻撃を食らったみたいだし、もろに入っただけ全然効いてないっばい」

ゆつくりと歩いてくる男性の姿に変わりはない。

「本気をだしたのに、見た目ノーダメってどういう事だよ」

「心が折れそう。でも、今は親父が来るまで耐えなきゃ」

男性から視線を外さず、次の行動に移ろうとする。だが、男性の姿が消失すると同時に、後ろから強烈な殺気を感じ、左右に飛び退く。刹那、二人の間を黒い衝撃波が吹き抜け、余波に吹き飛ばされる。両手を吹き飛んだ二人に向け、黒い小さな塊を大量に放つ。

「うわあああああああ！」

「きゃあああああああ！」

身体がボロボロになっても攻撃は止まない。悲鳴が止み、白い絨毯に赤いシミが広がる。

その光景を見ていた睡蓮の頭に、夢の内容を思い出す。焼かれ、切り刻まれ、目も当てられない姿になった町民。その夢が自分の過去だと分かり、同じ惨劇が繰り返られる事への、恐怖と悲しみが込み上げてくる。

「あ……あ……」

男性がゆつくりと睡蓮に近づき、その動きにあわせて後退る。後ろに硬い感触がし、振り返ると壁がある。

——みんな、ここで死んじゃうの……？ 嫌だ……嫌だ……嫌だ！

「嫌ああああああああ！！」

睡蓮に触れようとした男性の右腕が消し飛ぶ。建物が大きく揺れ、睡蓮の身体が浮かび、背中から二対の純白の翼と、二対の漆黒の翼が生える。天使に見えれば、悪魔にも見える異様な姿。その姿を見た男性の口が始めて動く。

「破滅の女神、我々の下に来てもらうぞ」

消えた右腕の形を黒い霧がとる。男性は睡蓮に近づかず、少し離れた所から黒弾を飛ばす。直撃と共に黒煙が上がる。

「睡蓮！」

三人の声が部屋に響く。僅かに羽を広げる音が聞こえ、風が黒煙を吹き飛ばす。外傷どころか汚れ一つ付いていない姿に、男性が笑い出す。

「あっははははは！ これは凄い！ それだけの力があれば王の望みが叶えられる！！」

さっきまで抑えられてたのか、男性の身体から黒い霧が溢れ出す。距離を詰め、睡蓮を殴ろうとするが、光の壁が阻む。壁に波紋ができ、力を分散させる。睡蓮の足元に白い魔方陣が現れ、全ての翼が

純白に変わる。

光が強くなり、男性を包む黒い霧が徐々に消えてく。あと少しで完全に消える時、翼が消え、床に倒れこむ。

「す…睡蓮！」

雫が駆け寄ろうとするが、それよりも早く一哉が男性と睡蓮の間に割って入る。手に持っている二本の刀は、恭弥が使っていた焰に少し似ている。

「ほう…“六神将”の一人、神藤一哉か」

「こつちの世界でその名前を知ってるのは、過去に一緒に旅をしたやつだけのはずなんだけどな」

「“王”から聞いたんだよ。『要注意人物の一人』だって」

「やつぱり、あの時の違和感は“それ”か」

そんなやり取りの最中も、警戒を解かない。隙を見せたら一瞬で殺られる——と互いに思ったから。

『悠美、聞いてたか？』

『うん。扉はいつでも開けるわよ』

『恭弥と瑠璃が酷い怪我してる。睡蓮は力の暴走に肉体が耐え切れなかったみたいで、肋骨三本、左足、両腕の骨に罅が入ってる』

『扉内部に回復魔法の術式をセットするまで少し時間が掛かるから、それまで時間を稼いで。準備ができたらこつちから念話する』

『なるべく早く頼む』

念話を切って腰を落とす。刃に炎と風が纏わり、唸りを上げている。

「双炎刀・朱雀、魔装30%」

手が朱い鳥の足のようになり、手首から肩まで羽に変わる。短かった黒髪が肩まで伸び、朱^{あか}に変わる。

床を蹴って男性の前まで一気に移動し、刀を振るうが黒い霧が進攻を阻む。

「焼き尽くせ」

炎の勢いが増し、霧を侵食し始める。霧の防壁を突破し、男性の左腕を肩から焼き切る。すぐに黒い霧が腕の形をとり、止血する。

『後二分で準備が終わるわ』

『わかった』

後ろに飛んで距離をとると、大量の風弾と空弾が男性に命中する。

「恭弥、瑠璃、あまり無茶をするな!」

「後、少しなんだろ…」

「時間稼ぎくらいなら、この状態でもできるよ」

「五人相手でもか?」

男性の言葉にみんなの目が大きく開かれる。感じる異質の魔力は目の前に居る男性のだけだ。

「一哉さん、その人が言ってることは本当よ」

「誰だ!？」

声のした方を向くと、再び背中から翼を生やした睡蓮。否、何か別の存在。神々しくもあれば、禍々しい気配を持つ存在。

「私は睡蓮であって睡蓮で無い者。いずれ分かる日が来るわ。さて、あなた達には消えてもらわないとね。この子達の邪魔をさせるわけにはいかない」

無数の光の槍が穂先を下に向け、男性を囲むように出現する。少女の指が男性を指すと、穂先が男性に向けられる。

「殺れ」

少女の言葉と共に、全ての槍が男性に襲い掛かる。必死の抵抗も空しく、全ての槍が男性に突き刺さる。だが、血が出ない。

あまりにも不思議な出来事に、恭弥と瑠璃が驚き、疑問の声を上げようとするが、全員の頭に響いた悠美の声によって遮られる。

『扉の準備はできたわ。お父さんは早くその部屋から出て』

『わかった』

「敵は全員倒したから、心配する事ないわよ。そろそろ身体をこの子に返さないと。近いうち、また会いましょう」

少女が一時の別れを告げると翼が消え、男性の身体に刺さっていた槍はガラスのように砕け散った。一哉は男性の遺体を回収して部屋から出る。凜と雫、弓束は最後まで何が何だか分からず、呆けていた。

部屋に大きな扉が現れ、ゆっくり開かれて部屋に光が満ちる。あまりの眩しさに、子ども達は目を細めた。

階下の広間に居る大人達は、子ども達が己に課せられた、戦いの宿命に身を投じる事を嘆いていた。

t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

キャラ紹介

氏名：花咲睡蓮

年齢：12歳

生年月日：1994年10月2日

性別：女

身長：142cm

体重：35kg

髪型・髪の色：肩に届く位ある銀髪ストレート

瞳の色：右目が金色、左目が蒼色のオッドアイ

詳細：

五歳の頃に神藤家にやってきた記憶喪失の少女。

成績は中の中、見た目は上の下。

誕生日は神藤家にやってきた日。

氏名：神藤雫

年齢：12歳

生年月日：1994年10月2日

性別：女

身長：142cm

体重：35kg

髪型・髪の色：腰まで届く銀髪ツインテール

瞳の色：右目が蒼、左目が紅のオッドアイ

詳細：

自分の誕生日の時に、自分と瓜二つの少女、睡蓮がやってきた。
成績は同じ。

氏名：神藤恭弥

年齢：15歳

生年月日：1992年4月5日

性別：男

身長：172cm

体重：60kg

髪型・髪の色：黒髪ショートヘア

瞳の色：藍色

詳細：

神藤家の長男。運動神経は学年1位

たまに家に帰らない時があるが、親は理由を知っている。
成績は中の下。見た目は中の上。

氏名：神藤瑠璃

年齢：13歳

生年月日：1993年5月19日

性別：女

身長：152cm

体重：47kg

髪型・髪の色：黒髪・ショートヘア

瞳の色：黒目

詳細：

神藤家の長女。ボーイッシュな感じでスポーツは得意。
成績は下の中に近い上。見た目は中の中。

氏名：綾乃弓束

年齢：13歳

生年月日：1994年5月10日

性別：女

身長：145cm

体重：37kg

髪型・髪の色：腰まである金髪。

瞳の色：赤

詳細：

睡蓮と雫の親友。家は金持ち。

運動神経はそこまで良くない。

成績は上の中。見た目は中の上。

氏名：来栖零次

年齢：14歳

生年月日：1993年2月15日

性別：男

身長：168cm

体重：55kg

髪型・髪の色：肩まで届く黒髪

瞳の色：スカイブルー

詳細：

恭弥にしょっちゅう奇襲を仕掛けるが、軽く避けられる。

成功回数は528回中0回と言っいろんな意味ですごい結果に……

成績は上の上。見た目は中の上。

氏名：月影凜

年齢：13歳

生年月日：1993年7月10日

性別：男

身長：148cm

体重：40kg

髪型・髪の色：腰まである黒髪

瞳の色：黒

詳細：

髪が長く、少女のような見た目で声も高い。

男性に告白されたこともあるが、その後、その男性は病院に担ぎ込まれている。

成績は上の下。見た目は中の上。

1 話（前書き）

やっと書けた。

三ヶ月も間が空いてしまった……..
すいませんでした！

文字数およそ一万（笑）

少し変なところがあるでしょうが、本編スタート♪

1話

広大な森の中心に見える、大きく太い木から少し東にずれた所にあるきれいな花畑。

その中心で気持ち良さそうに眠っていた睡蓮は、そよ風で揺れた草花のくすぐったい感触に目を覚ます。

「ここ、どこ？」

まったく見覚えのない土地に不安を抱くが、同時にきれいな景色に心を癒されている。空から降り注ぐ陽射しは暖かく、やさしく頬をなでる風が気持ちいい。

——何でだろ？ こんな場所、記憶にないのに、懐かしい感じがする……

立ち上がって辺りを見る。見えるのはきれいな草花と、雲が少しある青い空。そして、どこまで続いているのかわからない森と、少し離れた所に見える他よりも大きく、太そうな樹。ああいうのを御神木と言うのだろう。

睡蓮は少し迷ったが御神木を目印に、それとは反対方向に歩いていく。

森の中に入る直前で、小石と長めの枝を拾う。小石ですぐ近くの木に目印を彫り、枝を地面に押し当てて森の中に踏み込む。迷わないよう地面に直線の印を付け、印を彫った木の直線状にある他の木に、同じ印を彫って御神木を見る。少し進んだだけじゃ、あまり離れたように実感しないが、時々御神木を見ないと、見失うからだ。それだけこの森の木々は背が高く、陽の光を遮るほど枝が伸びている。もう少し進んだら見失うかもしれないから、枝で地面に曲がないよう印を付けている。

——ちゃんと真直ぐ進めてるのか不安。

表情は不安と言うより、どこか懐かしんでるみたいだ。

暫く進むと、大きな獣の爪跡や血痕がある木が見つかった。少し怖くなってきたがそのまま進むと、前方の光が強くなった。森から抜けられると思ったが、目に映った光景は木が折れ、様々な生物の死体。胴体が真つ二つに切られているもの、爪で引き裂かれ、肉が抉られているもの、首が無いもの、四肢が引きちぎられているもの、木の下敷きになっているもの。それらの血で赤く染められた空間。その異常な光景に耐えられなくなった睡蓮は、悲鳴を上げる事無く気絶した。

気絶した睡蓮に歩み寄る一匹の黒い毛並みをした子どもの狼。目の前に広がる光景に、苦い表情を隠せない。口で睡蓮の服の襟を銜え、背中に乗せる。落とさないように注意しながら、森の中を駆ける。向かう先は湖。だが、その行く手を阻むように一体の熊の様な魔物が狼に襲い掛かる。魔物の攻撃を飛んで避けた時、背中に乗っていた睡蓮は地面に落ちた。魔物は狙いを一番近い睡蓮に定め、腕を振り上げた。鋭利な爪が木漏れ日に照らされ、光りの軌跡を描きながら振り下ろされる。狼は慌てず、足元に黒い魔方阵を展開し、魔法の形をイメージして脳内で魔法名を唱える。

——グランド・シヨット。

拳大の土の塊が魔物の腕を弾き、睡蓮を守る。邪魔をされた魔物は標的を狼に変更、一気に間合いを詰める。攻撃範囲に入ったとき、魔物の足元に黒い魔方阵が出現する。直後、周囲の地面が盛り上がり、魔物を包み込む。上空には巨大な土の塊。支えていた力がなくなったのか、急降下した土の塊は魔物を押し潰す。だが、血は出ない。両方とも脆かったのか砕けてもとの土になり、魔物に覆いかぶさる。それでも来る衝撃は相当なもの。

動く気配が無い事を確認し、睡蓮に歩み寄る。再び背中にしつかり乗せ、落ちない事を確認すると駆ける。

木々の隙間から射し込んでいる日差しが、さっきよりも強くなる。開けた場所が近い事を意味する。前方の明かりが眩しく、目を細め

て進む。

森を抜け、目の前に広がる光景は巨大な湖。水は澄み渡り、ひんやりとしていて気持ちいい。森の中で見た光景が、嘘のように思えてくる。だけど、夢じゃない。血の匂いと光景が、未だ鮮明に思い出せる。

この森でそんな光景を見かけるようになったのは、二週間ほど前、突然の出来事だった。森にいた生き物が性格に関係なく突然暴れ始め、種族に関係なく惨殺を繰り返していた。立ち向かった生き物は次々と殺され、三十体で攻め、漸く一体倒せるほどに強かった。

それからは度々起こり、生息していた生物は激減。今では暴れている生物を見かけたら逃げるのが、生き延びるために当たり前となった。

暗闇の中を漂う睡蓮。見える景色はどこまでも続く闇。光は自分からしか発せられていない。不思議に思うが、自分の姿が全く見えないよりは安心する。次に不思議に思ったのは、地面が無いのに落ちていかず、ただふわふわ浮かんでいる状態。それが夢だということを実感させるが、あまりにも意識がハッキリしすぎていて信じられずにいる。

暫く、本当に何も無いのか確認していたが、自分から光が発せられてるといふよりは、光を身に纏っているという表現のほうが正しいことしかわからなかった。

目の前に小さな光球が現れる。徐々に大きくなり、人の形になる。光が弱まり、睡蓮と同じように光を纏っているような状態になった事で、姿がハッキリした。見た目は睡蓮をそのまま幼くした感じの女の子。唯一違う点は瞳の色。睡蓮は右目が紅で左目が金なのに対し、女の子は右は同じでも左が蒼。

女の子の口が動く。

——あなたは忘れている。

——何を……？

——昔の自分を。思い出せる？あの人たちに会うまでの自分を。必死に記憶を探る。だが、思い出そうとすればするほど、頭痛が酷くなる。それどころか、みんなの顔は覚えているのに、どんな所に住んでいたのかすら思い出せない。

——向き合いなさい。自分と、自分の過去と……そうすれば、全て思い出せる。

「……ん……」

瞼をゆつくりと持ち上げる。陽の光が眩しく、目を細めて辺りを見回す。そこは花畑でも、悲惨な光景のあった場所ではなく、湖の畔。今まで長い夢を見てたのかと疑う。でも、記憶があまりに鮮明すぎて夢とは思えない。

「目、覚めたんだね」

声のしたほうを向く。そこにいたのは黒い髪をした少年。だが、普通の少年ではない。頭から生えてる髪と同じ色の獣の耳と、お尻から生えてる尻尾がそう思わせる。その少年の手には林檎が二つ。少年は睡蓮に近づくと、林檎を一つ差し出す。

「はい。お腹空いてるでしょ？」

少年が言うが早いか、睡蓮のお腹が音を立てる。よっぱと恥ずかしかったのか、顔を赤らめて少し俯き、小さな声でありがとうと云って受け取る。湖で林檎を洗い、一口かじる。少年は近くに座り、

睡蓮に話しかける。

「君、どこから来たの？ どう見ても、この森の近くにある村に住んでるわけじゃないよね？」

少年に言われて記憶を探る。だが、全くと言って良いほど、思い出せない。覚えてるのは自分の名前と義理の家族、友人、二つの不思議な夢だけ。

「覚えてない……」

少年はそっか、と言って林檎を一口かじり、口の中に何も入っていない状態になってから喋りだす。

「僕も何も覚えてないんだ。気がついたらこの森にいた。この森で最も大きい木の前に……名前も覚えてない」

「名前も？」

「うん」

気になる言葉があったから聞き返し、返ってきた言葉は肯定の意。暫く考え、ひとつの答えに到達する。

「私が名前を付けてあげる」

「ほんとに？」

「うん。そうねえ……」

再び考え始める。これといった名前が出てこない。少年の顔を見ると、無邪気な子供みたいに嬉しそうにしている。特徴は獣の耳と尻尾。ふと、頭に浮かんだ種族の名称、狼。英語でウルフ。これじゃそのまますぎると思い、一語消した結果――

「ウル…なんてどうかな……？」

自信がなさそうに、思いついた名前を口にする。少年は小さく、何度もその言葉を言う。

「ありがとう。気に入ったよ！」

笑顔でお礼を言う。喜んではからなのか、尻尾を左右に振っている。睡蓮は、気に入ってもらえたことと、お礼を言われたことに柔らかな笑みを浮かべて、よかったと呟いた。

「私は花咲睡蓮。家族や友達の顔と名前は覚えてるけど、それ以外は何も覚えてない」

でも……—と、睡蓮は続ける。

「寂しくないって言ったら嘘になるけど、ウルが居てくれれば、少しは紛らわせるかな？」

そう言っ、苦笑する。会ったばかりで、何も知らない相手に対してここまで心を開けるのは、ウルも記憶喪失だからなのだろうか？
ウルは顔を赤くして、少し俯く。

「それって、僕も『一緒に旅していい』ってこと……？」
「そのつもりで言ったんだけど、嫌？」

首を少し傾げて問う。ウルは目を大きく見開き、慌てて口を開く。

「いい、嫌じゃないよ！むしろ、嬉しいんだ。誰かに必要とされる

事が……この森に住む狼で、人語を喋れて魔法を使えるのは僕だけ。みんな気味悪がって、避けるんだ」

「ん？ 狼って……どういうこと？」

「僕、狼なんだ」

「え？」

「だから狼」

「じゃあ、何で人の姿に？」

「魔法……なのかな？ 僕にも分からないけど、人間状態と獣状態、獣人状態の三つになれるんだ。人間状態と言っても、今みたいに耳と尻尾が出てるしね」

目の前に居る少年——ウル——が、実は狼ってことに驚きを隠せなかった。耳と尻尾がウルの感情によって動いていることから、本物ってことには気付いていた。それでも、本当に狼だって事は、少し受け入れ難い事実だったことに変わらない。

——ま、ほう……っ！？

「いつ！？」

「睡蓮？！」

急に頭を抑えて苦しみ出した睡蓮に、どうすればいいのかあたふたする。

——い、たい……！ 頭の中に何か、浮かんでくる……これは、あの夢に出てきた少女？ それと、二十代半ばの男性と女性……私の過去だ。

幼い頃の睡蓮とその両親であろう男女は、夢で壊滅した村に住んでいた。大きくもなく、小さくもない極普通の家。

三人の会話までは聞こえない。それはまだ、思い出していないから。

睡蓮が手から炎を出したり、風を操ったりしている。時々、制御

に失敗したのか身体の至る所に切り傷を作ったり、火傷している。
それを女性が手に光を集め、傷口に翳す事で治している。

——これが、魔法……

頭痛は治まった。

立ち上がって湖の方を向き、右手を前に出して氷をイメージする。

「睡蓮、どうしたの？」

ウルが心配して声を掛けるが、集中を切らすわけにはいかない。
空気が冷え始める。右手から魔力を放出すると、湖が凍りついた。

「魔法…使えたの？」

「今、思い出したの。完全にじゃないけどね」

「体調はどう？」

「もう大丈夫」

心配してくれてるウルを安心させるために、笑顔で応える。

ウルが安堵の息を吐いた時、近くの茂みが揺れた。刹那、二人の
間に緊張が奔る。

荒いけど確かな殺気に当てられ、硬直する。睡蓮は深呼吸をし、
大量の氷の針をイメージする。空気が冷え始めるのと同時に、茂み
から狼が飛び出し、二人に襲い掛かる。

——リリース・ランサー。

言葉には出さず、狼の方を向いて腕を大きく横に振る。足元に漆
黒の魔方阵が展開され、魔力が溢れ出す。大気中に含まれる水蒸気
が昇華し、イメージした通りの形になった。それらは一斉に狼に襲
い掛かり、身体を貫く。

「殺し、た……私が………！」

——殺すつもりは無かったのに、殺した——初めて動物を殺した。覚えてなくても分かる。今まで動物を殺したことが無いって、感覚で分かる。

「睡蓮、落ち着いて。この森…世界で生きていくにはこうするしかないんだ。特に、今のこの森は異常だから。全ての魔物が凶暴化し始めてる。平気なのは極僅か…もしかしたら、僕たち意外には居ないかもしれない。襲い掛かってきたら、殺すつもりでやら無いと逆に命を落とすよ」

「わかつた……」

「森を抜けよう。日が暮れる頃には抜けられるだろうから」
「うん……」

t o b e c o n t i n u e d

2話

森の中を歩きながら、睡蓮はこの世界の事をウルの知ってる範囲で教えてもらった。

ここはルグニス大陸の北東に位置するククルの森。近くには村がある。名前はククル。昔は村のある場所までが森だったらしく、ククルというのはこの森に住む神の名前らしい。

年に一回、村の人はそこで取れた作物を持って森の中にある祠へ向かう。どんなに時が経っても、それだけは変わってないみたいだ。その村から南西に向かって馬車で半日、徒歩でおよそ二日はかかる位置に、この大陸の七割を統治している王の住む街、王都グランチエスタがある。

国は七つあり、さつきもあげた“グランチエスタ”、ルグニス大陸の残りの領土を統治している“ガラーナ”、リディア大陸の西にある最も小さい“グラガン”、同じ大陸の東にある“キムニス”、大陸ではなくグラナ島にある島と同じ名前の“グラナ”、ラーデシア大陸にある“シェリダン”、グラール大陸を統治する“プレニクス”。

これらの国は数十年前まで戦争をしていたが、どんどん死んでいく兵士を見て、とある少女が“導きの光”という魔法を使って戦争を止めた。その少女の名前は――

「竜崎美悠^{りゅうさきみゆう}。この世界を災厄から救った英雄の一人」

――竜崎って、確かお義母さんの旧姓だったはず。双子の妹が居て、その人の名前が今の人と同じ……！ 偶然、だよ……？ まさかと思っただが、そんな筈はないとすぐに今の考えを頭の中から消し去る。

そんなことよりも気になった言葉の意味を聞く。

「災厄って？」

「この世界と魔界を隔てる空間が歪んで、所々に魔界に通じる歪が生じたんだ。魔界の瘴気はこの世界に住む全ての生物にとって有害なもの。どんなに瘴気の量が少なくても、長時間吸い続ければ身体に悪影響を及ぼす。その瘴気がこの世界に溢れ出した。この出来事を、人々は災厄って呼んでるみたい」

「へえ。それじゃあ、その歪みを直した人達が英雄って呼ばれるんだ」

「そうだよ」

更に話を続ける。

この世界には魔物と呼ばれる生き物が居る。大人しい魔物は人間との共存も出来てる。

人間以外の全ての生物は魔物という枠で括られていて、種族名称がある。

——グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

話が終わった直後、森がざわつき始めた。地を揺るがす獣の咆哮が響き、少し遠くの木々が倒れる。

「な、に……？」

怯えた様子で呟く。猫ほどではないが、人間よりも聴力の優れている狼のウルはその小さな声を聞き取り、応える。

「凶暴化した魔物が暴れ始めたんだ」

複数の足音が二人に近づいてくる。

「走るよ！」

「う、うん！」

二人は迫ってくる足音から逃げる。だが、人間と狼では走る速度が全く違う。ウルは睡蓮の走る速度に合わせ、少し前に行く。しかし、一向に足音が遠退く気配が無い。それどころか、近づいてきている気がする。

「睡蓮、僕の前を走って！」

「分かった！」

狼の姿から獣人形態——人の様に二足歩行になり、全身が毛に覆われた人間形態より少し身長の高い姿——になった。

真直ぐに走らずジグザグに、時には木の幹を蹴って飛びまわり、それでも睡蓮の姿を見失わないよう気をつけている。そんなウルの通った場所には黒い魔方阵が現れ、すぐに消えている。

——戦うのは嫌だ。殺したくない……！でも、殺らなきゃ殺られちゃう……！！どうすれば……

心中で迷ってる時、頭の中に女の人の声が響いた。

——何時までも迷ってないで戦いなさい！好きで殺してる人なんてほとんど居ないわ。それでも殺さなきゃならない時、みんなその罪を背負って生きてるの。時々その重荷に耐えられなくなって、体調を崩す。夢の中で責めてくる声に怯え、寝られなくなり、自害しようとする人も居る。それでも、生き抜く人がこの世界には沢山居る。死にたくないなら戦いなさい。そして、生きてその罪を償うの。今のあなたに出来ることはそれだけでしょ？

——その通りだね。ずっと、殺さないで済む方法だけを考えてた。誰も殺さないで済む方法なんてないのに。“戦いの中にあるのは生と死だけだ”って、お父さんが言ってたけど、本当だね。戦いの中、誰も殺さないで済む方法なんて、絶対に無い。

先ほどよりも怯えた様子が、完全にでは無いが無くなった。

——あなたが誰なのか、どうして頭の中に声が響くのかは教えてくれないよね？

——うん、無理。

——即答！？ 少しくらい悩んでくれてもいいじゃない。

——じゃあ、季節が一巡りするまでには教えてあげる。時々話しかけるから。じゃあね。

ありがとう——とお礼を言うと、彼女が笑った気がした。

走りながら下を向き、深く息を吸って吐く。顔を上げ、右手に意識を集中させる。右手の周りの空気が冷え、魔力を放出。大気中の水分が昇華し、肘から先に氷の剣が纏われた。

「やるよ、クライス」

顔も知らない人の名前を、何となく声に出した。時々夢に出てくる男性。彼が何者なのかは知らない。ただ、とても大切な人の一人ということだけは分かっていた。

髪が淡い水色に染まる。首に提げた十字架のネックレスに、嵌め込まれた五つの黒い石。その内の一つが青い光を放つ。

「ウル！」

この世界に来て初めて出来た友達の名前を呼ぶ。彼は睡蓮が何を考えているのかを読み取り、背中合わせに立つ。

「戦えるの？」

「戦うのは嫌。でも、命を落とすのは…友達を失うのはもっと嫌なの」

「睡蓮……」

「魔法は思い出したけど、それでも少しだけ。そんなに力はないから…ウル、守ってくれる？」

「もちろん！」

耳を澄まし、僅かな音でも逃さないように注意する。耳だけでなく、全身の感覚を研ぎ澄まし、音以外の気配にも気を配る。

強い風が吹き、音が聞き取りづらくなる。嫌な予感がした睡蓮は咄嗟に魔法を発動、氷の球体で自分とウルを包み込む。障壁に罅が入った。さっきのはただの風ではなく、鎌鼬という現象。ただ、これは自然現象ではなく、魔法を扱うことの出来るモノによる攻撃。

「風魔法。睡蓮、この障壁はどのくらい持つ？」

「一分くらい。かなり力を消費するから、後のこと考えるとそれが限界」

「十分だよ」

今まで通った道に現れては消えた黒い魔方陣が浮かび上がった。

「魔導式トラップ……」

光が強くなる。それと同時に現れた様々な生物が、魔方陣の上から動けなくなる。否、大地が足を絡めとり、動きを封じている。

——アース・ブレイク。

大地が砕け、飛び散った破片が魔物を攻撃する。しかし、それだけでは終わらず、破片が一つの塊になった。

——グランド・ショット！

一瞬、ほんの一瞬の出来事だった。土で出来た巨塊が一直線に、視認することすら難しい速度で突き進み、魔物を押し潰す。飛び散った鮮血が草木を汚す。

「凄い……」

感嘆の声を漏らす。そこで気を抜いたのがいけなかった。背後から手の形をした木の枝が振り下ろされ、集中が切れたことで障壁はいとも容易く碎け散る。当たった瞬間に響いた音に瞬時に反応し、飛んで躲した。碎けた氷の欠片は宙を舞い、陽の光を反射してキラキラと輝いている。

——フリーズ・ランサー！

ほぼ零距离からの攻撃を防ぐ術を持つてなかった植物型の魔物は、一瞬で蜂の巣のように穴だらけになる。

「擬態！？」

「植物型、無機物型が得意とする能力だよ」

「見分ける方法は？」

「ない！！」

「威張ることじゃないよね！？」

「喋ってる暇はないよ！」

横から飛び出してきた魔物に剣を振るう。肉を斬る感触が腕を伝う。鮮血が舞い、髪を、顔を、服を、全身に血が付着する。

——気持ち悪い。吐き気が込み上げてくる…堪えなきゃ。殺したくない…迷っちゃダメ。殺らなきゃ殺られる。

「ごめんね……………」

刃に魔力が纏われ、振り抜く勢いが増す。

——氷刃破斬。

魔物の身体を真っ二つにし、魔力が剣から離れて突き進む。木を切り裂き、その先に居る魔物さえも倒す。

「睡蓮…」

「迷わない…迷ってられない………まだ死ぬわけにはいかないから……」

「次から魔力の膜を全身に纏うと、血が付かなくなるよ」

「そういうことは先に言ってくれる……!?」

睡蓮のツツコミが森の中に響き渡る。

それ以外に物音一つしない。異様なぐらいに。警戒は解かないで、魔法の行使を止めた。周囲を見渡すが、何かが近づいてくる様子は無い。

「終わった…の？」

「そうだといけど。注意しながら進もう」

「うん」

森を抜けるために歩き始める。空はすっかり、茜色に染まっていた。

陽が完全に沈んで夜になった頃、睡蓮と人型になったウルは漸く森を抜けることが出来た。

二人はやつと休めると思い息を吐くが、目の前に居る巨体の魔物を見つけた事で顔が引き攣る。

「ウル…私たち、もしかして狙われてる？」

「もしかしくなくてもそうだよ」

はあっ——と同時にため息を吐き、戦闘態勢に入る。

魔物の大きさはおよそ五メートル弱。ゴーレムと呼ばれる、岩石で出来た無機物型の魔物だ。基本的に物理ダメージをあまり受け付けない姿だが、ちゃんとした弱点はある。

一点集中攻撃。主に槍がその代表例だ。だが、いくら氷や土を操って槍を作る事が出来ても、使用者が未熟ではその効果を十分に発

揮できない。魔法で飛ばすという方法もあるが、横からの衝撃に弱いその攻撃方法では、届く前に狙いを逸らされて意味が無い。

二人が使う魔法は土と氷を操るもの。両方とも固形であり、相手には不利。だが、もう一つだけ使える力がある。それは――雷。しかし、これも岩石でゴーレムには意味が無い。それも、普通に使えばという意味だ。

二人はゴーレムに向かって駆け出す。ゴーレムはその巨腕で押し潰そうとするが、当たる直前で閃光が弾けた。振り下ろされた巨腕は止まることなく地面にぶつかり、亀裂を入れる。腕を退かすと、そこに睡蓮とウルは居ない。ゴーレムはどこに行ったと、辺りを見渡す。しかし、見当たらない。

――フリーズ・ブラスト。

刹那、冷気の弾丸が頭部に着弾し、凍りつく。攻撃が飛んできた上を向く。そこには宙に浮かんでいる睡蓮の姿があった。

地面に巨腕を潜り込ませ、睡蓮目掛けて土塊を飛ばす。だが、それが飛んでいくことはなかった。

――グランド・スパイク！

――アイス・スパイク。

土と氷の針が地面から飛び出し、土塊を貫いて止めたから。

「ウル！ 少しの間だけ注意を惹き付けて！」

「分かった！」

睡蓮の足元に漆黒の魔方阵が展開される。気温がどんどん下がり、二人の息が白くなる。

ウルは紫電を身に纏い、ゴーレムから視線を外さずに屈む。ゴーレムがウルを殴り飛ばさんと拳を突き出した瞬間、光が弾け、ウルが消えた。

――ライティング・ランス……

ゴーレムの背後に、獣人形態になったウルが雷の槍を持って現れ

「零距离からの攻撃なら可能性はあるけど」

「零距离って、私たちなら普通に出来るじゃない」

「出来るね。でも、皮膚が硬いと思うよ」

「関係ないよ！」

——アイス・スパイク！

——ブリッツ！

氷の針が地面から飛び出すと同時に、大気中を紫電が駆ける。紫電はそんなに効いてないが、氷の針は魔物の動きを封じるために足を貫く。皮膚はゴーレムほど硬くないのか、ゴーレムを倒した時より威力を抑えても問題は無かった。脅威なのは咆哮と口から吐く炎、巨体から容易に想像できる威力の物理攻撃だけ。咆哮は魔法で音を遮断すれば問題無い。物理攻撃も四足を潰したから大丈夫だと思い、安堵したのも束の間、氷を砕いてその怪我からは想像出来ない程の速さで駆ける。狙いは睡蓮。

睡蓮はもつと速く気付くべきだった。足を貫いた時、痛みに咆えなかったことに。

——嘘…何で？ 足を貫いたのに、何で動けるの？ 怖い……逃げなきゃ…逃げなきゃ死んじゃう！？

逃げないと！——って頭で分かっているけど、身体が動かない。

——嫌だ…！ 死にたくないよ！ 誰か、助けて…！

「睡蓮…！」

——ホーリー・ランス。

七本の光の槍が降り注ぎ、魔物を貫く。放ったのは睡蓮。

「すい…れ、ん……？」

——グルルルルウウ………！

「まだ、動くの…」

——シャイニング・レイ。

一柱の光が魔物を飲み込み、消し去る。残ったのは巨大な戦いの爪跡と、睡蓮とウル。

「力、使いすぎちゃった。お休み、睡蓮………」

睡蓮、否、睡蓮の身体を借りた何者かは眠りに着き、空を飛んだままだった睡蓮は、重力に従い落下を始める。

「危ない！」

一瞬で睡蓮の真下に入り、両腕で受け止める。規則正しい寝息を立てている睡蓮は、さっきまで激しい戦いをしていたとは思えないほど、穏やかな寝顔をしていた。

「お休み、睡蓮。僕も疲れた………」

どこからか液体の入ったビンを取り出し、中身を周囲に撒いてから眠りに着いた。

t o b e c o n t i n u e d

3話

公園のベンチで一人、水無月蓮^{みなづきれん}は足の上で手を組み、その上に自分の頭を乗せて寝ていた。

五月上旬。気温は十度弱。これから更に暖かくなる季節にはかなり寒い一日。そんな長袖一枚でも厳しい中で、学校指定のブレザーを横の鞆の上に丸めて置き、ワイシャツを肘まで捲っている。

「……………んっ……………」

小さく呻いたかと思うと、顔を上げて辺りを見渡す。

——今…何時だ……………？

そう思い、鞆の中に閉まってある携帯電話を取り出して確認する。
午後12時47分。

学校に行くのが面倒になった蓮は、家を出はしたものの、公園で寝ていた。

「あ……………どうすっかな……。どうやって抜け出すかな……」

蓮の足元を見ると、黒い穴が開いていた。少しずつ足は沈み、身体は引っ張られてベンチから落ちそうになっている。

「あ、おっさん!」

「ん？ 俺のことか？ ………………って、何だその状況!？」

蓮に呼び止められたおっさんは声のした方を見て驚愕し、蓮の傍に駆け寄った。

「俺も分かんね。とにかく引っ張って……」

「緩いな!!」

突っ込みを入れながらも伸ばされた手を掴もうとし、バチツ——と音がして見えない何かに弾かれた。

「いつ……!」

「おっさん、大丈夫か?」

「静電気のような痛みがあっただけだ」

「あ、無理なんだったらいいや。呼び止めてすみません」

「だから緩すぎ!!　なんか帰りづらいじゃねえかよ!」

公園の中を見回し、少し離れた所に遊具修理用の工具が落ちているのを見つけ、おっさんはそれを拾って少年目掛けて投げる。

「え?　ちよつ!?　待つ!?　止まってええええ!!!」

——さっさとこっちに来なさい!!

「へ?　って、ギャアアアアア!!」

穴の中から手が現れ、蓮を引きずり込む。同時に工具が彼の頭のあった位置を通過し、木の幹に刺さった。それを見て顔は青ざめ、冷や汗を流しながら彼はこう思った。

——殺すきかあああああ!!!!

「きゃああああ!!」

「何あれ!」

通り過ぎようとした人々が騒ぎに気付き、悲鳴を上げる。

「あゝ、もう！　うつせえ！！　ちよ、誰か引つ張ってくれ！！」

蓮はうるさすぎる悲鳴に顔を顰めながらも、助けを求めた。

「あ、ああ！」

数人の男が蓮に歩み寄り、顎や服の襟を掴んで引つ張り上げる。さっきの見えない壁みたいなモノは消えていた。

「ちよ、く…首、しま……。ほ、骨折れ………！」

——やばい…このままじゃ窒息死か首の骨が折れて死ぬ！！
だんだんと彼の顔は青ざめていく。しかし、そんな事をお構い無しに男達は引つ張り続ける。身体は少しずつ穴から抜け、腕が見えてきた。

救出作業を行っていない人たちは、彼の様子から止めるべきなのかどうか悩んだが、そうすること意外に救出方法がないため、止めなかった。

襟や顎から手を離し、腕を引つ張る。蓮がやっと息出来ると安堵したのも束の間、今度は腕が？げそんな痛みに悲鳴を上げる。

「ぎゃああああああ！！　腕、腕？　げるうううううううう
！！！！」

「我慢しろ！　なかなか抜けないんだから！！　それに、そう簡単に？　げたら世の中の人のほとんどが腕とか足なくしてるぞ」

「いや、？　げないとしても肩外れるから！」

「そう簡単に外れたら………」

「同じ説明しなくていいから！　我慢すりゃぁいいんだろ……！」

仕方なく痛みに耐え、脱出できるのを待つ。だが、引つ張ってる

のは男達だけでなく、蓮の頭に直接響いた声の人も、穴の中から引
つ張っている。

——だ〜か〜ら〜……。

蓮の背筋に悪寒が走る。それは風邪を引いた時のとは全く違い、
恐怖によるもの。

——さっさとこっちに來なさいって言ったでしようがああああ！！
穴から十数本もの腕が伸び、蓮を引っ張り出そうとしている男の
手を引き剥がす。

「ちょ、何この腕！？ 気持ち悪！！」

「ちゃんとカメラ回せ！ 大スクープだぞ！！」

騒ぎを聞きつけたどこかのテレビ局の人が蓮のことを撮影してい
る。

「あゝ、何か疲れた。どうにでもなっちゃえ。野次馬じゃ〜な〜」

「また緩くなつたし！！」

騒ぎすぎて疲れたのか、眠たそうに言った蓮の言葉に、最初に蓮
の状況に気付いた——呼び止められた——おっさんが突っ込みを入
れる。こんな状況でまったりしてられる人はそう居ない。

「あゝ、腕気持ち悪〜」

「もう突っ込まねえぞ」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

蓮がおっさんのことをジーツと見つめる。おっさんはその視線を無視し続けると、だんだん、蓮の瞳が潤みだした。

「泣きそうになるなよ！ めちゃくちゃメンタル脆いな！！」

「おっさんの負けだな」

「何に！？ 俺は何に負けたんだ！！？」

おっさんの問いに蓮は悩む。悩みに悩み、何かを言おうとしたところで穴の中に消えていった。

「だから俺は、何に負けたんだああああああ！！！！」

おっさんの叫びは、野次馬の悲鳴に掻き消された。

大量の手によって穴の中に引きずり込まれた蓮は、一人の女性と向き合っていた。

「さっきの手は、全部あんなのか？」

「あんなにたくさんの手があるように見える？」

はつきり言っただけ見えない。だが、女性意外に、この空間には誰も居ない。

「この空間に繋がる穴を作ったように、あの手もやったんじゃないかって思ったから」

「どうして私が作ったって思うの？」

「何となく、そんな気がしたから」

蓮はそう言いながら辺りを見渡す。どこまで続いているのか分からない暗闇。この中に一人で、長い間居ると発狂してしまいそうだ。

「さっきの手は友達に頼んだの。あなたの言うとおり、この空間に繋がる穴——歪^{ひずみ}は私が作ったわ」

「ふうん。で、何の用？」

「あなただけあっちに送り損ねたから行ってもらわね。向こうにはあなたの知ってる人が居るから、見つけたら合流してね」

「めんどいからパス」

「拒否権無いから。行つてらっしゃい」

女性がそう言うと、蓮の姿が消えた。

暫く蓮の居た場所を見つめ、ポケットから写真を取り出した。

「無事に、全てを終わらせてね……——蓮」

写真には今と全く変わらない女性と、その腕の中で寝ている幼い頃の蓮が写っていた。

泣き出しそうな女性から紡がれた言葉は、蓮に届くことはない。それでも、想いだけでも届いて欲しいと願い、再度口を開く。

「絶対に生き延びて……………」

一粒の雫が女性の頬を濡らした。

「ぎゃあああああああああ！」

雲一つない青空に、少年の叫び声が響き渡る。眼下には針葉樹の

森。下手をすれば、彼のお腹が木の頂点に貫かれることになる。

「あゝ…その終わり方もいい——」

その光景を思い浮かべ、あまりにもグロくて顔が青ざめた。

「わけねえだろおおおおおおお！！！！」

直後、自分の考えにツツコミを入れる。だが、そんなことしている間にも、彼の死期は迫っている。

「あの人が言ってたのは、『行つてらっしゃい』じゃなくて『逝つてらっしゃい』だったのかよ！」

違ふと分かっているながらも、この状況だとそう考えてしまう。
蓮の身体は高い所からの落下ということもあって、速度は最大まで上がっている。下が木ではなく、大地や海でも死ぬ。

「木があるだけまだマシか……」

呟き、空中で体を丸め、来るであろう衝撃に備える。彼の身体は木の真上からずれていることが分かった。

「マンガとかじゃ、木の枝や葉っぱで衝撃を和らげて着地するとかあったからな。実際に出来るとは限らねえし、失敗したら死ぬけどな」

言った直後、彼の身体は木の枝を折りながら落下し、しかし、速度を落としながら地面に到達する。

「ぐえっ！」

背中から落ち、肺に溜まっていた空気が一気に抜けると同時に、変な声を出した。蛙が潰れた時に出すような声を。

そんな彼の身体には無数の切り傷があった。全て葉っぱで出来た傷だ。服も所々切れており、ボロボロだ。

「何とか、上手くいったか……ってえ」

痛みに耐えて起き上がる。場所はかなり小さいが森の中。上空から見たが、少し歩いた所に道がある。だが、どっちに向かって歩けば道に出られるのかが分からない。

「骨は折れてないっぽいけど、まだジンジンする……」

多少涙目になっているが、歩き出す。

〳五分後〵

「全然出口見えねえな」

〳十分後〵

「いつになったら出れるんだよ」

〳三十分後〵

「これ、迷子じゃね？」

〳三時間後〵

「ハア…ハア…ハア…空から…見たとき、ハア…こんなに広くなかったぞ……！ どう考えても迷子じゃん……！」

木に凭れ掛かり、上がった息を整える。なかなか森から出る事が出来ず、一時間ぶつ通しで走り続けた結果、今の状況が出来上がった。

「昔から方向音痴なのは認めるけど、ここまでとは思わなかった。もう泣きたい。泣いていい？ 泣いていいよね？！ ってか誰も居ないし泣くぞ……！」

誰に向かって言っただ、俺——と思いながらも、口を閉ざすことは出来なかった。

「もう、こんな所から出てやるうううううううううう……！」

半泣き状態で走りだした。

く更に三時間後く

「や、やっと……抜けられた………」

とつくに陽は沈み、辺りが暗くなった頃、木の枝を杖代わりに何とか立っている状態の蓮が森の外に居た。

彼の視線の先には、月明かりを反射しているモノがある。

「水…の、音？」

ゆっくりと、歩き、走り疲れて悲鳴を上げる身体に鞭打ち、その

場所まで進む。

「川だ……」

靴と靴下を脱ぎ、川の中に入る。

「冷たくて気持ちいい」

気温は十度を切っていてとても寒い日なのだが、彼には関係ない。どちらかといえば寒いのを好む。気温がマイナスの日でも、彼は長袖一枚で過ごしていた。普通の人なら肌を刺す冷たい風に震えるが、彼は涼しい顔で気持ちよさそうにしているだけ。

しゃがみこんで水を両手ですくい、顔を洗う。傷に少ししみて痛い、死ななかっただけマシだと思う。

「ほんと……よく死ななかったよな」

そう言つて空を見上げる。

夜空に散りばめられた無数の星はとてもキレイで、幼い時に何度か見た景色を思い出す。それも、ここまでキレイではなかったが。近くにあった石の上に腰を下ろして空を見ていると、お腹が鳴った。

そう言えば、朝から何も食べてない。

思い出した彼は辺りを見る。森の中なら木の実とか食べれそうなのがあるが、また道に迷う可能性がある。川の中を覗きこんでも魚が見当たらない。

「ほんと、今日は運がないな」

「グルグルルルウウ……」

「飢えた猛獣が今にも襲い掛かって来そうだし」

はあ……—とため息を吐き、顔だけ背後を向く。戦う術もないのに逃げようとせず、黙って睨み続ける。

自分の運のなさに落胆し、訳の分からないことにいきなり巻き込まれた事を恨み、十数匹の狼の群れを殺意の籠った瞳で睨む。

身体を群れの方向に向けたと同時に、一番近くに居た三匹が飛び掛る。手元にあるのは杖代わりになっていた木の枝。屈んで躲し、頭上をがら空きの腹を一突き。彼の後ろに水飛沫を立てて倒れる。立ち上がり、左側から攻撃を仕掛けてきた狼を袈裟に振った枝で川の中に叩きつけ、反対側の狼を横薙ぎで吹き飛ばす。

「まったく……こっちは昼から今まで、森の中をさまよってて疲れてんだよ。足ガクガクなんだよ。疲れすぎて立ってるのもしんどいんだよ！」

枝が折れた。予想は出来ていたが、もう少し大丈夫だと思っていた。

「あ……いつもだったら死んでもいいやって思っのになあ……何でだか……—」

そこで言葉を区切って頭を乱雑に掻き、俯いてため息を吐いた。

「死にたくねえ……！」

軽く俯いたまま睨む。

生き残られる可能性は限りなく0に近い。それでも、何もしないで死ぬのは嫌だった。

「十分くらいなら、持つだろ……」

枝を投げ捨てる。刹那、狼の群れが一斉に動き出す。左に身体を逸らし、屈み、バックステップで躲し、隙を見て反撃を入れようとするが、数が多くて途中で躲す動作に切り替えなければならず、一撃も決める事が出来ない。

——右から攻撃が来る。しゃがんで蹴り上げる。
突然聞こえた声に動きを一瞬止めるが、信じてしゃがみ込む。

「うおっ！ マジで来た！」

頭上を飛び越えていく狼の腹に、しゃがんだまま蹴りを決める。

「なっ?!」

蹴りの威力はさっきのと比べてあまりにも強く、それを行った本人も驚きを隠せなかった。

——次は正面。自分の頭と同じ位置に右ストレートを叩き込め。

「ああああああ!!」

雄たけびと同時に拳を顔面に叩き込まれた狼は、数十メートル吹っ飛んだ。

「^{シヤ}夜天に輝く星よ、闇に埋もれし光よ、全て一つとなり、強大な光の束となって降り注げ！ レイ!!」

頭に浮かんだ呪文を唱える。この際、恥ずかしいとか関係ない。生き残るために、自分を信じる。

呪文に籠められた生きたいという想いに応えたのか、光が降り注ぎ、狼の群れを飲み込んで消し去る。

「終わ……ってないか……」

倒し終わり、休もうとさつきと同じ石に腰掛けた時、木の化け物が自分を取り囲んでいるのに気付いた。数はおよそ五十。

「もう、動けねえよ……」

石の上に座り込むが、諦めているわけではない。動く力はないけど、さつきみたいな事が起きる可能性がある。

「魂亡きモノ、私の傀儡となれ……踊る人形！」
ダンシング・ドール

様々な大きさの石が集まり、三メートルを超す人型の巨大な化け物が生まれる。

「成功した……けど、めっちゃ疲れる……」

化け物の肩に座って呟いた。

化け物は木の魔物——トレントを薙ぎ払うが、暫くしたらすぐに復活して数が減らない。

「数が多すぎる……。こつちも増やすか」

もう一度詠唱し、今度は水の傀儡人形を五体作り出した。

水の傀儡は手を鋭い槍の様な形にし、トレントを貫く。数は徐々に減っていくが、蓮の体力の消耗が激しく、傀儡が二体消えた。

「これじゃ、倒しきる前に魔法が解けるか」

また一体、傀儡が消えた。トレントはまだ半数以上残っている。思考を巡らせ、何か方法がないか考える。狼を消し去った時の技を使おうとしたが、何て言ったのか思い出せない。その時、頭に数え切れないほどの光の槍が、敵を殲滅するイメージが浮かんだ。それを発動するための呪文も一緒に。

「時には闇の中で輝き、時には闇を消し去る光よ——」

空気が澄んでいく。傀儡は音を立てて崩れた。操っていた力を、今から発動する魔法に使用するためだ。蓮の周囲に光が集まる。夜の闇になれた目には眩しすぎるくらいの光が——

「——無数の槍となりて闇を貫け！」

集まった光は一つの巨大な球体となり、蓮を飲み込む。光の中で蓮の口が動く。紡がれるは最後の鍵^{パス}。

「ホーリー・ランス!!!」

刹那、光が弾ける。光は小さな粒となり、空中で形を槍に変え、トレントを蜂の巣の様な形に変える。

「まだ、上空に一体。ほんと、ついてねえな」

そう言いながらも、次の動作に移る。さっき放たれた魔法の残滓は蓮の上空に集まり、巨大な光球が出来上がる。

「破光槍！」

光は一本の、普通の大きさの槍になった。だが、それは名前の通

り、破壊の光。力を極限まで圧縮した、全てを貫き、破壊する光の
槍。

「これ終わったら眠りてー」

空を飛んでいた鳥型の魔物は翼を折り畳み、蓮に向かって急降下
する。

「ハアアアアー!!」

放たれた槍は光の軌跡を残し、魔物を貫く。空中で光が消滅した
と同時に、川の中で蓮は倒れた。そのまま眠りに着いた蓮は、さら
に下流へと流されていった。

t o b e c o n t i n u e d

3話（後書き）

｝キャラプロフィール｝

氏名：水無月蓮

年齢：12歳

生年月日：1994年6月20日

性別：男

髪型・髪の色：黒髪で前髪は少し目に掛かる程度。後ろは短め。

瞳の色：灰色

身長：158cm

体重：45k

詳細：

方向音痴で不真面目な正確。

過去の出来事から死を恐れていなかったが、今回は何故か死にた
くないと思った。

成績は普通。見た目は中の上？（何故疑問系かは聞かないで）

4話（前書き）

どうしてこうなった。

栗のキャラが、おかしくなった！

まあ、シリ阿斯をぶち壊すキャラが沢山欲しいのでちょうどいいんですがwww

4話

魔物を殲滅し、川の中で眠りについた蓮は、海まで流されていた。それでもなかなか起きず、どんどん沖へと流されていく。

「あゝ……俺って、ここまで不幸な体質だったんだ」

気が付いた時には岸が遠くに見えた。

最初は傷口に海水が染みて痛かったが、長い間空を見てたら慣れた。泳いで岸まで行こうにも、前日の疲れが残っていて思うように体が動かない。かといって、このまま流されていれば遭難してしまう。悩みに悩み、かなり遠くに見えた船に助けてもらおうと声を出す。

「おゝい！ その船！ 助けてくれー！！」

だが、いくら大声を出しても気付いたようには思えない。やはり、距離が遠すぎた。

再び悩み出す。泳いで岸を目指せば遭難しないで済むと思っていたが、前日の事を思い出す。そんなに広くない森を何時間も彷徨い続けたこと、自分の方向音痴の酷さを。目的の場所が見えてても真直ぐ泳げない自分じゃ、もしかしたら迷子になる。そう思って泳ぐという案は却下になった。

「あ、魔法使えばいいじゃん」

思い、実行に移す。

前日、魔法を行使したときの感覚を思い出す。体内を流れる力を感じ、光の柱のイメージをする。勿論、攻撃用ではなく、居場所を

知らせるもの。

「いや、光の柱じゃなくてもいいか。花火みたいなもの。上空で光が弾けるイメージ。白い光じゃなくて、黒い光……」

イメージが徐々に固まる。黒い光というイメージはし辛かったが、真黒ではなく、外側が白くなってるのをイメージしたら出来た。

「気付いてくれよ……」

掌を空に向けて突き出す。白い光が球状になり、黒く染まった。次の段階に移す。イメージと同時に黒い光の球体が空へ向かって飛び、およそ五十メートルの地点で弾ける。打ち出された光球の後を追うように、感覚を少しだけ空けて同じ光球が二発放たれる。上空で弾け、五秒くらい間を置いて、再び光球が放たれる。今度はさつきよりも感覚を長く空けて三発。また五秒空いて最初と同じ感覚で三発。

短く三発、長く三発、短く三発、『……——……。』。S O Sのモールス信号だ。

これは家にあった本に書かれていた。何となく、役に立つかもしれないと思って覚えていたのが、こんな場所、こんな形で使うことになるとは思わなかった。

「この世界でも通じるかは分からないけど……」

光に気付いたのか、船が近づいてくる。モールス信号が伝わらなくても来る可能性はあったが、黒い光は普通ありえない。不吉だから近寄らないとかだったら困るため、念のためやってみただけだ。

「おーい、坊主か？ さっきの光でモールス信号を出したのは？」

「俺以外に近くに誰か居るように見えるか？」

「けっ、生意気なガキだな。今、梯子下ろすから登って来い」

船の甲板から縄梯子が投げ下ろされる。丸められた状態から勢いよく広がるそれは、きれいに蓮の頭にヒットした。

「つつう……」

「悪い、坊主。大丈夫か」

「結構痛い」

答えながら梯子を上る。途中で魔法で空飛べるんじゃないの？——と考えたが、今更だ。

甲板に上がり、助けてくれた船のみんなに礼を言う。

「何、礼を言われるようなことしたわけじゃないさ。そんなことより、聞きたいことがある」

「ここに居る理由だったら、川で気絶したらここまで流された」

「よ、よく生きてたな。どちら辺から流されたか分か——」

「分かん」

全て言い終わる前に返事をした。

最初に彼に話しかけてきたおっさん——おそらく船長——は、これからどうするか船員と相談している。

「飛行魔法……飛行魔法……」

その間、さつき思いついたことが可能なのが確かめるために、空を飛びイメージをする。一番飛びイメージをしやすいのは鳥の様な翼だが、邪魔になりそうだから止めた。

「浮いているイメージだったら翼はいらないか……でも、イメージが湧かない……………」

考えに考え、最初の案の翼を思い浮かべた。慣れたら翼を消して飛べばいいと思って。

土色の翼が生える。いや、生えるというよりは構成されていく。

「魔力放出、イメージ固定…イメージどおりに翼を構成……………」

少しずつ、少しずつだが、翼が出来上がっていく。船員もそのことに気が付いたのか、蓮のことを見ている。

「構成完了…………次は飛べるか、か」

「す、凄いな…」

「こんな魔法、初めて見たぞ」

「お前、何者だ？」

屈んで翼を広げ、今にも飛び立とうとしたところで、みんなの視線が自分に集まっているのに気が付いた。

何者だと問われても、答えられるのは名前と人間ってことだけ。だけど、彼らも馬鹿じゃない。蓮が人間ってことは分かっている。それでも今、目の前に広がる光景に驚き、疑問の声を漏らしてしまった。

「水無月蓮。飛ぶから離れて」

翼を羽ばたかせて飛び立つ。発生した風は近くに居た人を数人吹き飛ばした。

「魔法を維持しながら飛ぶのって、めっちゃむずいな」

船の周りを暫く飛び、再び船の上に降り立つ。翼は蒸発するように消えた。

「おい、坊主、一応近くの港町まで送ってやる。飛んでいくのも疲れるだろ」

「ありがとうございます」

「おい、治療師ヒーラー！ 傷を治してやれ」

「はい」

茶髪の女性が蓮の傷口に手を翳す。淡い緑色の光が溢れ、傷を少しずつ治していく。

「この怪我、どうしたの？」

「空から落ちて木の葉っぱや枝で」

「空からって、今の飛行魔法、失敗したの？」

「そんなところ。めっちゃくちゃ高いところから落ちたから、死を覚悟したね」

「す、凄いこと体験してるのね……」

女性の頬が引き攣っている。その後ろでは船員全員が苦笑していた。

「飢えた猛獣や木の化け物の群れ、大きな鳥に襲われた時は本当に死を覚悟したな」

「え?!」

「そんな時、初めて魔法使ったし」

笑いながら凄いことを言う蓮に、周囲の者から表情が消える。

「猛獣つて、どんなやつだ？」

「たぶん狼」

「木の化け物つてのは、こんなやつか？」

一斉に聞いてくる船員達に苛立ちながらも、聞き取れた内容から答える。

一人の男が図鑑のあるページを開いて写真を見せる。それには昨夜、蓮が倒したトレントが写っていた。

「そうそう、そいつ」

「こいつはトレントって魔物だ」

「へえ」

魔物の名前には興味なさそうに返事をする。

正直なところ、一斉に聞いてくる船員たちに魔法をぶっ放そうと考えていた。

「初めて使った魔法ってのはどんなのだ？」

記憶を探る。倒すことに必死だったからハッキリとした記憶が無い。

全く思い出せず、二番目に使った魔法を発動する。

ダンシング・ドール
踊る人形……」

小さな声で鍵パスを言うと、海が荒れだした。急な出来事でみんな驚いているが、船長と一番近くに居た女性は落ち着いていた。

「人じゃなくて鯨くじらでいいか」

「へ？」

蓮の発言に、女性が目を見開く。こんな傍で鯨の形をした海水を操られると、下手したら船が壊れてしまう。

「ちょ、それは止めて！ 船が沈んじゃうから！！ せめてイルカにして！！」

「冗談だよ」

水柱が上がり、中から海水で出来たイルカが三匹出てきた。それは蓮の周りを飛び続ける。

「初めて使った魔法は覚えてないから、二番目に使った魔法。かなり疲れるから解くね」

実際、そこまで疲れるわけではないが、この世界では何が起きるか分からない。無駄な魔力の消費は避けておきたい。

船の外にイルカを移動させ、魔法を解く。小さな飛沫を上げて元の海水になった。

「傀儡魔法か…珍しいな」

「そうなのか？」

「使える人は少ない。飛行魔法を使えるやつは結構多いが、翼を出したやつはもっと少ない」

ふーん——と、返事をして海を見る。同時に傷の治療が終わって女性は船の中に戻っていった。

「一発終了出来るか分かんねえけど、光槍！」

光を掌に集め、握りつぶす。弾けた光が棒状に伸び、先端は鋭く、

貫くのに特化した槍になる。

高く跳び上がり、槍を海に投げ込む。海中を勢いが衰える事無く突き進み、ある物体に突き刺さる。

「船を真直ぐ進めろ！ 巻き込まれるぞ！」

船長が大声で指示を出す。何が起こってるのか分からずに混乱するが、作業だけは休まず行う。

「爆ぜろ！」

船がさっきの位置からある程度離れたところで、蓮が叫ぶ。さっきまで船のあった所が輝き、轟音と共に巨大な水柱が出来る。

「なっ！？」

突然の出来事に驚き、言葉を失う。そんな船員達に船長が説明した。

「船の下に怪物モンスターがいたのに坊主は気付き、光の槍を投げ込んだ。で、その後に爆発させた。船を移動させなきゃ巻き込まれて死んでただらうけどな」

説明の最後に、船長は蓮を睨む。

「移動させなかったら俺が大声で言ってた」

海を見ながら言った。未だに警戒を解かない蓮に船長は何も言わず、再び指示を飛ばす。

「手前らあ！ まだ終わってねえぞ！ 大砲の準備をしろ！！」
「必要ねえ。次で仕留める」

淡い光を発する右手を左から右へ、水平にゆっくり動かす。光の軌跡はその場に止まらず、少しずつ前に進む。

「何やってんだ？」

「黙って見てろ」

雰囲気が変わった——その場に居た全員が同じ事を思った。

「貫け——」

静かに紡がれる言葉は、魔法を発動する一歩手前。

海水が盛り上がる。ゆっくりとその巨体を露にした怪物は、まるで鯨。だが、上から下に向けて生えた大きな牙と、前に突き出した下の牙で、危険な魔物だと分かった。

「ホーリー・ランス」

ゆっくり進んでいた光が弾け、無数の光槍が魔物を襲う。

「そんなちんけな魔法、あいつにやあ効かねえ！」

「いいから黙って見てろ」

いくら光槍が魔物に当たっても、効果が見えない。このままじゃ船ごと食われると、船員は慌てるが、船長と蓮だけは落ち着いていた。

「そろそろか……」

「爆ぜろ」

光槍が爆発する。爆発は一分以上続き、収まった時、魔物はボロボロになっていた。

「急いで離れねえと、また襲われるぞ」

「え？ 倒したんじゃない……？」

「気絶しただけ。流石に殺すことは出来なかった」

魔物は大きな飛沫を立てて海の底へと沈んでいった。

気絶させたことも倒したと言っくんじゃ？ 船員の一部はそう思っても声には出さない。本人が倒したと認めてないから。

魔獣、アクレピオス。体調は小さな島ほどある怪物だ。並大抵の魔導師では一瞬で殺されてしまう。ギルドではSSS級クエストとして知られている。気絶させるだけでも偉業と言える。

「とんでもねえ奴を助けちゃったな……」

船長は一人、小さく笑っていた。

光が洞窟から溢れる。光が収まった時、洞窟内から魔物がボロボロの姿で出てきた。

——フォトン。

洞窟内で光球が弾ける。刹那、魔物が吹き飛び、陽の下にボロボロの姿を晒す。

「お母さんは何でこんな所に飛ばしたかな」

洞窟から不満の声を漏らしながら少女——神藤雫が姿を現した。きれいな長い銀髪は陽の光を反射してキラキラと輝いている。右手には白、左手には黒の拳銃が一丁ずつ握られている。

「途中、術式を書き加えたから場所がランダムになったんでしょ」

それを宥めるのは、隣を歩くきれいな銀色の毛並みをした狐。でも——と、まだ納得がいかないのか続ける。

「魔法を使えるようになってなかったら死んでたかもしれないんだよ」

「ははは……否定出来ないや」

雫の言ったことに半分納得した自分に苦笑する。

そんなやりとりをしている二人の背後に、ゴーレムが迫っている。後ろを振り向かず、白い拳銃の銃口だけ向ける。

「ダークネス……」

銃口に光が集まる。しかし、その光は銃の色とは真逆の黒。

「ブラスト」

ゴーレムの拳が振り上げられ、胴ががら空きになる。そこにタイミングよく放たれた黒い光弾は胴を貫き、尚、勢いが衰える事無く、背後の魔物も一掃する。

「さっきから何度も見てるけどさあ……」

「何？」

「容赦、ないね」

目の前で行われたことに、苦笑しながら思ったことを言う。

「手加減してたら時間掛かるもん」

それに——と、俯いて暗い表情で続ける。

「睡蓮と違って私には、あの記憶がある……。この先何が起こるのか、大体の予想がついてる。こんなことで躊躇ってる暇なんてないの」

ね？——と、笑顔で狐——ホープに問いかける。

（ほんと、強いなあ）

初めて魔法を使った時とは違って、いつの間にかとても頼もしくなっていた雫に、少し嬉しく思えた。

「それでも、身内が敵だと躊躇うでしょ？」

「それは当然でしょ！」

いくらなんでも、家族や友人を殺すことを躊躇うのは当然の反応でも——

「どうしても殺らなきゃいけない時は、躊躇わない」

覚悟は出来ている。もう何年も前から決めていたことだから。

ホープはそれ以上何も言わずに、黙って歩く。行き先は正確に決まっているわけではない。それ以前に、現在居る場所がよく分からないいんだから、あてもなく彷徨う以外に考えはない。

「町があつたら現在の^{いま}この世界の情報を手に入れないとね」
「うん」

浜辺を歩き、崖の上に行くための道を探す。浜辺には数え切れないほど、魔物の死体が転がっている。襲ってくるモノには容赦せず、魔法で蹴散らしていた。

「ダークネス・ブラスト」

感情の起伏が感じられない声で紡がれる魔法名。魔物の方は一切見ず、放たれた光弾は砂浜を削りながら突き進む。

「崖に向かつては撃たないでよ」

「分かってるよ」

あまりにも躊躇しなさ過ぎの雫に不安になったのか、軽く注意をした。ちゃんと考えずに放っているわけではなく、崖側から襲ってくる魔物に対しては、フォトンという光球を爆発させる魔法で対処していた。

「何か、気が付いたら撃つてそうだから一応ね」

「私はそこまで馬鹿じゃないからね」

少し気に障ることを言われて、黒い拳銃の銃口をホープに向けてる。

「そっちに入ってるの実弾だよね!？」

「そうだよ」

笑顔で答えるが、会話は物騒極まりない。

「実弾、残り何発？」

「MAX十二発と、六カートリッジある」

「つてことは、計八十四発か」

先のことを考えると、十分な数だ。と思ったけど、何があるか分からない。もしかしたら全弾使い果たす可能性もある。

「なるべく早めに町を見つけないと」

「こっちは魔法が効かない魔物に襲われた時か、魔力が切れた時用だからね。」

「フォトン」

およそ十個の光球が爆ぜ、魔物を吹き飛ばす。

「飛行魔法使用すれば早くない？」

「今まで何十回も試して失敗したの忘れたの？」

再び、笑顔で黒い拳銃の銃口をホープに突きつける。

「今日は成功するかもしれないじゃん……」

「得意不得意があることを忘れないでね」

引き金に指を掛ける。流石に不味いと思い、何度も大きく頷く。黒い拳銃を突きつけたまま、白い拳銃を上空に向け、魔法を放つ。光弾の先には大きな鳥の魔物。狙いは少し逸れ、翼を撃ち抜いたが、それで終わりではなかった。

「ダークネス・レイン」

光弾が弾け、黒い粒が降り注ぐ。砂浜に居た魔物を殲滅し、海側から迫る小さな光の槍を相殺する。

沖のほうを見る。見えたのはアクレピオスとそれに襲われてる船、無数の光の槍。

——こんな魔法であの怪物を倒すつもりなの？

雫がそんなことを思った直後、槍の嵐が止み、爆発が起きた。

「フォトンに似てる」

確かに似てはいるが、爆発するという点だけだ。

フォトンは敵の側に光球を作り、爆発させて攻撃する魔法。

ホーリー・ランスは好きな方向に無数の光の槍を飛ばし攻撃する魔法。本来、爆発はしない。術式を追加して自由に爆発するように変化したのが今の魔法、フォトン・ランス。もし相殺されても、僅かな魔力の残滓ざんじから爆発させることが出来る上級魔法。

「危ない！」

そのことにいち早く気付いたホープが障壁を張って防ぐ。

爆発で視界が悪くなる。魔物はどうなったのか？——そのことが気になる二人は砂埃が消えるのを待つ。

「う、そ……だよね？」

「アクレピオス、倒しちゃったの……！」

二人の目には無傷の船と、海中に沈んでいく魔物の姿が映っていた。その事実、二人は驚きを隠せない。

「世の中にはとんでもない人が居るんだね」
「そうだね」

船を目で追いながら雫が言ったことに、ホープが同意する。船は
どどん二人の居る浜辺側に近づいている。

「船、こっちに来てるね」

「近くに港町があるんじゃないかな？」

「だったら見失わないようにしないと」

二人は船がどこにあるのか、時々確認しながら浜辺を歩く。

——ヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

「っ!？」

海の中から、響いてくる低い声。こんな大声を出せる海の生物を
二人は一匹しか知らない。

「アクレピオス！」

「生きてたんだ！」

海中から再びその巨体を露にする。場所は船の傍ではなく、二人
の目の前。と言っても、数キロ離れているが。

ものすごいスピードで二人に迫る魔物。雫が構えるは白い銃。逃
げるそぶりは見せず、銃口と顔だけをそっちに向ける。

「ホープ、準備はいい？」

「オッケイ」

銃から黒い光が漏れる。すでに限界までエネルギーが蓄えられて
るにもかかわらず、さらに力を注ぐ。

ホープは尻尾を九本に増やし、それぞれの先端に白い光を作って

いる。尻尾を顔の前に持っていき、光が合わさる。

「ダークネス……」

「ホーリー……」

同時に紡がれる言葉は正反対の性質を持つ属性。

「ブラスト」

全ての音が世界から消えたかのように思えるほど、静かに言い放たれた言葉はハッキリと聞こえた。

刹那、二つの光は魔物目掛け、その進路にあるもの全てを消し飛ばしながら突き進む。

「合体魔法、ユニゾンレイド バニシング・ブラスト！」

光と闇が合わさり、眩い光を放出して消失。いや、確かにそこにある。色を失って見えなくなったただけだ。

「赤は炎、青は水——」

「茶色は土、群青は氷——」

「空色は風、黄色は雷——」

「白は光、黒は闇——」

呪文を唱えるように、透き通る声で二人の口から次々と言葉が発せられる。

「八つの色には決まった属性がある」

「それぞれ二つずつグループが出来、対を成す」

「それらの間に生まれるのは無——」

「色は……透明………」

今放った魔法の説明をするみたいに、紡がれた言葉。空間を挟りながら魔力の弾丸は突き進む。魔物とぶつかり、互いの力が拮抗する。やがて弾丸が圧され始めた。

「夜天に輝く星よ、闇に埋もれし光よ——」

とても澄んでいるキレイな少年の声が、二人の耳に届いた。どこから聞こえるのか周囲を見渡すが、あるのはさつき、自分達が戦っている魔物に襲われていた船。まさか、あそこから!?——と思ったが、違った。

上空。それも、かなり高い所から聞こえる。見上げると、蓮が茶色い、鷹や鷲のような翼を生やし、空を飛んでいた。その周りには十数個もの白い魔方阵。

「強大な光の束となって降り注げ！ レイ!!」

呪文を唱え、今、自分の中で一番強い魔法を発動した。光の束は魔物の身体を貫き、塵に変えていく。

背を撃ち抜かれ、牙を折られ、身体全体を貫かれ、跡形も無く消えた。

「き、規格外にも程があるでしょ……」
「抵抗を許さない魔法って……」

詠唱を含め、魔法が発動されるまでの時間は約三秒。普通なら二十秒は絶対に掛かる最上級魔法。それを容易く、別の——それがどんなに簡単なモノでも——魔法を使用しながらの発動出来る人は、

数えるほどしかない。

「詠唱有りでアクラピオを跡形も無く消し去るって……—」
「無詠唱でもかなりの威力あるよね」

とんでもない人が居たもんだなあ——と、口をそろえて言う。
魔法を放った蓮は平然としていた。ただ、魔物の居たところを見
つめる。

暫くして船に戻ろうとした——刹那、水飛沫が上がる。その中か
ら人が飛び出し、手に持っていた棒で蓮に攻撃を仕掛けた。

——フリーズ・ランサー！

空間に響いた声。それとほぼ同時に、氷の針が謎の人物を襲う。

三人はその声に聞き覚えがあった。

同じ家で生活をしていて、自分と瓜二つの少女。

自分のマスターにそっくりで、間違えてしまいそうな少女。
クラスメイトで、いつも明るくてうるさい、一人になりたいのに、
しつこく話しかけてくる、苦手な少女。

「雫ちゃん、蓮くん、久しぶり——でいいのかな？」

血で汚れた服を着て彼らの前に姿を現した睡蓮。その姿を三人は
少し、怖いと思った。

t o b e c o n t i n u e d

4 話（後書き）

〕キャラクタープロフィール

氏名：ホープ

年齢：？

生年月日：？

性別：♂

体長：80cm

体重：1.5k

毛色：銀

詳細：

謎多き喋る狐。 雫と本人しかその謎は知らない。

5 話（前書き）

本当なら一昨日に投稿できたんですが、パソコンがネットに繋がらず出来ませんでした＞＜

全開よりも文字数はかなり少ないです。

5話

「睡蓮!？」

「ちっ…うぜえのが来た……」

「蓮くん、酷い」

乱入者の正体に雫は驚きのあまり名前を叫び、蓮は舌打ちを打って今までのふざけた雰囲気が消える。

二人の傍に黒い狼が突然現れた。

もう一人の来訪者に驚くが、それでも視線を海から外さない。どんな時でも対処する為には、絶対に敵から視線を外してはならない。それは喧嘩で嫌と言っうほど思い知らされた。

「睡蓮、今喋ってる暇はないよ」

「そうだった」

睡蓮の周りの気温が下がり、息が白くなる。腕に纏わりつくように大気中の水分が凍りつき、剣が出来た。

「そういう使い方もあんのか……。え〜っと……」

頭に白と黒の光の刀を二本、思い浮かべる。イメージが固まると同時に二色の光が集まり、刀が出来る。

「翼は邪魔だな」

翼が消える。飛ぶのに慣れるまでの補助のつもりで付け加えたものだから、消しても少し動きが鈍るだけで、あまり問題はない。

目を閉じる。魔力を全身にくまなく巡らせ、戦闘に支障が出ない

ように空気抵抗を減らす。

黒い刀を右手、白い刀を左手に持ち、適当に構えた。

「あんな構えでまともに戦えると思ってるの？ ああ！ 私が空を飛べれば代わりに戦えるのに！」

そのことに、雫が大声を上げる。飛びたいのに飛べない。その事実が、彼女を更に苛立たせる。

「出来ないものは仕方ないよ。ここでサポートすればいい」
「分かってる」

白い拳銃の銃口を敵から外さないように、海に向ける。どこから現れても、すぐに照準を合わせなきゃならない。それがサポートする側の仕事。

長い沈黙が、その空間を支配する。

いくらなんでも静か過ぎる。そのことに不安がどんどん募っていく。

「——フォトン・ランス」

無詠唱による魔法の行使。威力は詠唱有りに比べて劣るが、彼の魔法はそれを感じさせないほどに強力。

海に撃ち込まれた小さな光槍は少しして爆発し、大量の海水が宙を舞う。

「何でもいいから魔法を海に叩き込め！ 反撃の隙を与えるな！！」

「わ、分かった！」

「フリーズ・ランサー！」

理由は分からないが、言われたとおりに魔法を放つ。

（俺の予想が当たってたら、あの『女』は魔物を操る）

放たれた無数の小さな氷の槍は、海面に到達する直前に、数え切れないほどの魔物の攻撃によって相殺される。

「予想的中」。
ダンシング・ドール
踊る人形」

海水が動く。定まった形が無く、ただ——邪魔な魔物を薙ぎ払うための魔法。

「和訳して踊る人形。でも、人形だからって形が有ると思うな」

魔物達の中心——まるで身を守るために魔物を配置したようだ——に、蓮を襲撃した少女は居た。年齢は蓮より二、三歳下に見える。先に仕掛けたのは蓮でも少女でも、ましてや傍に居た睡蓮やウルでもなく——雫だった。

隙があればいつでも打ち込めるように、準備は整っていた。あとは少女を見つけるだけ。それが、『今』は味方である蓮が行ってくれた。それを利用する外無い。だが——

「そんな見え見えの攻撃じゃ、そいつには届かねえよ」

蓮による忠告。どう言うことか？ そう聞き返そうとして、止めた。魔法の維持と威力を落とさないために集中する必要があるからだ。

「っ！？」

結果、少女は容易くその弾丸を棒で叩き割った。あの怪物を十数秒とはいえ動きを止めた二つの弾丸のうち、一発——半分の威力を持つ片方の黒弾を。

「魔法にも慣れてきた。邪魔な魔物はお前らに任せただから」
「えっ!？」

蓮の発言に、少女以外の驚きの声がハモる。全員で魔物と少女を倒すと言えばみんな納得する。だが実際、それではダメだ。彼の予想、魔物を操れるって事は、いくら倒しても少女を倒さない限り終わらないということ。それが今、核心に変わった。端的に見ても、魔力切れを待てばいいと思うが、一人で数え切れないほどの数を操っている現状で息切れや体力の消耗が全く見られないことから、その方法は得策ではない。

それだったら大技を使って魔力を大量に消費している蓮が戦うより、雫や睡蓮、ウル、ホープの方が有利。なのに——

「絶対に俺が行く。これは変えない」
「どうして？」

睡蓮が問う。

間が暫く開く。答えを知ってるのは蓮と——少女。

「あいつの目は俺しか見てない。俺を殺す気で、あの怪物を操って襲ってきた。そもそもおかしかったんだ。アクレピオスが——陽の当たる所に出てくるなんて」

全員の顔が驚愕に染まる。アクレピオスという魔物を知らない睡蓮とウルを除いて。その間、攻撃をしてこない。魔物も、操ってい

る本人が指示を送らない——いや、答えを知りたくて、あえて指示を出さないから、襲ってくることはない。

何を見逃したと、遠くまで避難していた船員は凶鑑を確かめる。そこで気が付いた。少女の犯した決定的なミスが——

「アクレピオスは陽の届かない海底にしか住めない生物。餌は海底に住む他の生物で何とかなる。呼吸も鯨と違って肺ではなく、えらでしか出来ない。海面に浮上してくる必要が無い。仮に出てきたとしても、陽の光に弱いつて弱点がある。長くても一時間しか持たないほどの、最大の弱点が……」

そこで一息吐く。いつ、説明の途中で攻撃してくるか分からないから、気を抜いてはいけない。その考えが、その場に居る全員の精神をすり減らす。

そろそろ動くか——そう、少女が考えた時だった。再び、蓮の口が開かれたのは。

「一つ聞きたいんだけど……何で俺、狙われてんの？」

最もな疑問。思い当たることがなければ、誰もが口にするだろう。

「ボスの命令。それ以外に、無い……！」

魔物が一斉に動き出す。まるでどこから攻撃が来るのか、あらかじめ予め分かっているみたいに躲し、前進していく。

白い刀を振るう。白い斬撃が飛び、前方に居る魔物を一掃。斬撃の威力は衰える事無く、そのまま少女に襲い掛かる。それに対し少女は、腰のベルトから長さおよそ30cmの棒を三本取り出し、右手に持っていた接続部分が僅かに二つ見える棒に付ける。全部同じ長さで六本——およそ180cmの棒。明らかに自身の身長よりも

長いそれを、軽々と振り回し、斬撃を叩き割る。

同時、蓮が一気に動き出した。かなり離れていた距離を、宙を一步蹴ることで目の前まで移動し、腰溜めに構えた二本の刀を同時に振り抜く。少女は棒で防ぎ、半分に分けて反撃したが、空を切る。

「なれりや、地上戦より空中戦の方がやりやすいな」

気が付いたら背後に居た。音も、気配も無く、最初から居たかのように、背後に。

「黒刃衝」

黒い刀から放たれた衝撃波。それは空気を切り裂き、大きな唸りを上げ、魔物を巻き込みながら少女に襲い掛かる。

「くっ……！」

棒の接続部分が外れ、そこから魔力の鎖が伸びる。六本の棒全てが魔力の鎖で繋がれた武器——多節棍を縦、横、袈裟、逆袈裟に振り回す。

「風塵衝！」

衝撃波による攻防。それは相殺という形であっさりと終わり、多節棍による攻撃が蓮にヒットする。しかし、当たった瞬間に元々居なかったかのように、空気に溶けるように消えた。

「なっ！？」

「見えるものに惑わされるな……」

背後から聞こえた声。そちらに攻撃を仕掛けるが、誰も居ない。

「俺の魔法のほとんどは光と闇を操る……」

明らかなネタばらし。

「光は暖かく、闇は冷たい……。それと踊る人形を併せれば——」

霧が集まり、複数の人の形を取る。それらは全て、蓮だった。

「幻影を作り出せる。そもそも、踊る人形は、ダンシング・ドール生きているものでなければ何でも操れる。光も、空気も、水も、石も、草木も、ましてや光に含まれる色すらも操れる。それら二つの魔法を同時に昇華させた魔法——鏡花水月。互換を麻痺させる、最強の魔法」

刀の峰で少女を腹を思いっ切り叩き、勢いを殺さず左肩まで振り抜く。刹那、衝撃のあった場所から鮮血が噴き出した。少女は重力に従い、ゆっくりと、速度を上げながら海に落ちていく。

「眠れ」

少女は薄れゆく意識の中、今のは幻だと理解したが、すでに手遅れだった。

「つつても、魔力の消費が激しくて、長くは使えないんだけど、な……」

飛行魔法以外の魔法を全て解き、宙を漂って暫く休息をとることにした。

蓮が少女に仕掛けた直後、残った四人による激しい攻防——圧倒的な逆殺——が始まっていた。

「フリーズ・ランサー！」

無数の氷の針が、魔物を蜂の巣に変えていく。

「グランド・ショット！」

浜からかき集めた土が、巨大な砲弾となって魔物を蹴散らし——

「バニシング・ブラスト！」

白い光と黒い光が併さり、消えた弾丸が一直線に突き進んで魔物を消していく。だが、いくら倒しても、魔物の数が減らない。

「カシムル
神速！」

紫電が弾け、睡蓮の姿が消える。僅か一秒で、百メートル以上離れた所に姿を現した。

「氷刃乱舞……」

小さな声で紡ぎ出された言葉。刹那、魔物の半数以上が血を流し、海に沈んでいった。

「散れ——」

その身に纏われていた紫電が、小さな電気の粒となって宙を漂う。ゆつくりと口が開かれた。紡がれるは最後の鍵^{パス}。

「雷花！」

電気の粒が弾けた。味方に当たらないよう、ギリギリの位置まで攻撃範囲を拡大して魔物を倒す。

「睡蓮、あそこまで強かったんだ……」

「才能……もしくはあの記憶が、本当の家族と過ごしていた時の記憶か……。どっちにしろ、睡蓮も蓮も、本来の魔力の十分の一しかない。僕たちと同じで」

「それでも、私たちより魔力が多い……」

「そればかりはどうにもならない」

それは分かっているし、諦めている。いくら魔力が多くても、身体が持たなくちゃ意味が無いから。

——眠れ。

蓮の声が空間に響いた。全員が声のした方を向くと、少女は海に落ちていき、蓮は宙を漂っている。同時に魔物は動かなくなり、海に落ちた。

「蓮くん、何したの？」

睡蓮が傍まで飛んで近づき、聞く。三人もどうやって倒したのか気になるのか、耳を澄ましている。

「倒した」

「いや、それは分かっているから。どうやって倒したのか教えてくれる？」

「……鏡花水月で斬られたっていう幻を見せた。打撃の痛みは痛覚が、斬られたっていう認識は視覚がしてくれる。後は、脳が騙されて打撃じゃなく、斬られた痛みが身体を襲って終わり」

「ほお、脳が騙される…ねえ」

上空から聞こえた男性の声。目を向けると、短めの茶髪に顎鬚を生やし、大剣を肩に担いで、さつき海に落ちていったはずの少女を抱えた大柄の男が居た。

全てが終わったと安心しすぎた。少女はボスの命令と言っていた。それを聞いた時、仲間が近くに居る可能性も考え、警戒を解いてはいけなかった。

少し遅れながらも、蓮以外全員戦闘態勢に入ろうとするが――

「ああ、警戒しなくていい。俺はこいつの監視で来ただけだから、戦うつもりはない」

男性は大剣を背負い、空いた手で戦う意思が無いことを示す。

「そっちの少年は分かってるようだな」

「もし、俺の体力と魔力が完全に回復したとしても、お前には勝てない。魔力量はこっちの方が上だけど、経験で差が出るから」

「ほぼ、百パー正解だな。お前の魔力が仮に万全の状態だとしても、俺の本当の魔力量には届かない。万全じゃなくて、全開じゃないとな？」

「いや、意味が分からん。あれがおれの全開じゃないのか？」

「それがお前の力の全てじゃない。とだけ言っておこうか。じゃあな――」

振り向き、足元に赤色の魔方陣を展開した。

「存在するはずの無い者……」

「ちよつ、待て！ それはどうい……！？」

言葉を言い切る前に、男性は少女と一緒に消えた。
気になる言葉を残して……――

t o b e c o n t i n u e d

5 話（後書き）

アクレピオスが絡むクエストが有る理由はいずれ本編で出す……かも（汗）

出せない場合は後書きで説明します。

さて、あからさまなあの伏線。

実は今までの伏線でいくつか、この作品では回収できないものがあるんですよ（苦笑）

6話（前書き）

相変わらずグダグダです。

6話

何も無い灰色の空間を、黙々と歩き続ける。目的があつて歩いてるわけじゃない。気が付いたらここに居て、気が付いたら歩いていた。上下左右前後——全て同じ色で、果ての見えない空間を——

『よう、悩んでるようだな』

「誰だ、手前……」

突然現れた、灰色の髪に黒い瞳の少年。その人物には見覚えがある。いや、覚えていて当然。なぜなら——その人物は毎朝顔を洗う時に見ているから。

『俺はお前だ』

「誰が信じると思つてんだ？ おんな同じ見た目して気持ち悪いわりんだよ」

『ま、確かに自分そっくりの奴が目の前に居たら気持ち悪いだろうな。だが、事実だ。それはお前が一番分かつてるはずだが？』

舌打ちをしてもう一人の自分を睨む。見た目は同じ。意地悪な性格も一緒。でも、自分はいつほど黒くない。

怒りに身を任せ、拳を振るう。それを片手で受け流され、腹に一発決められる。

「がっ！」

吐血。殴り合いの喧嘩で、今まで血を吐いたことは無かった。痛みに耐え、肩を掴む。力を籠め、魔法を発動しようとするが——

『この空間じゃ魔法は使えない』

出来なかった。力が全く入らない。今まで、身体の奥底に感じてた力が、全く無い。

魔法が使えないんだったら真っ向勝負。確実に敵の意識を狩る。地を蹴り、鳩尾に肘鉄を叩き込むが、掌で防がれた。でも攻撃の手は休めない。もう一本の腕で相手を殴り飛ばした。

『グッ！』

怯んで少し後ろに下がった所に、回し蹴りを脇腹に決めた。足は引かずに真横に置き、目の前まで移動した力を乗せ、膝蹴りを顔面に叩き込んだ。

「手前が俺だつてんなら、こんなんじゃ終わんねえだろ！」

『クククク……』

「何笑ってんだ……！」

『もう、時間だ。じゃあな、偽りの鍵。次会う時にはもっと強くなつてろよ』

もう一人の自分は、どこも怪我してなかった。最後の膝蹴りは顔のど真ん中に入っていた。普通なら鼻の骨が折れてるはずなのに、無傷。口の中を切った様子もなかった。

それと最後の言葉、「偽りの鍵」。この意味を聞こうと口を開くが、声を出す前に意識が飛んだ。

「……………」

「何か喋りなさいよ！」

目を開け、天井を黙って見てみると、雫に怒られた。仕方なく、言葉を発する。

「知らない天井だ……」

「普通、おはようって、言っんじゃないかな？」

「……」

「何で黙るの!？」

睡蓮の声を聞いた途端に嫌そうな顔になり、黙り込む。天井を見上げ、再び襲ってきた睡魔に身を委ねようとして――

「二度寝するな!」

「……ってエな……」

雫に叩き起こされた。

「雫ちゃんだって、さっきしたくせに」

「九時前だからいいの。こいつは夕方の五時ごろから今まで、合計二十時間も寝てるからダメ」

「だから身体が怠いのか」

身体が重くて起きる気になれない。予想以上に眠気が酷く、瞼が重い。それと――

「魔力が0か……」

何で空^{から}なのか見当はつく。が、確証はない。この状態で一人でどこかに行き、魔物に出くわしたら生還する自信はないと、断言できる。

「蓮…だっけ？　これからどうする？」

「あ？　これから？」

「そう。私達はギルドで資金を集めながらみんなを探す。最近は変な事件が多発してるらしいからね」

「俺は——」

そこで、この世界に無理矢理送り込んだ女性の言葉を思い出した。

（向こうにはあなたの知ってる人が居るから、見つけたら合流してね）

ハッキリ言っ、睡蓮達と一緒に行動はしたくない。だが、行くあてもなく彷徨うと、飢え死にする可能性が高い。仮に、行き先が決まってたとしても、土地勘がない、かつ方向音痴の自分じゃ、迷子になってどっちみち飢え死にする。それだったら、目の前の少女達と行動した方が安全だ。

「暫くはお前らと行動する」

「分かった。でも、足は引っ張らないでよね」

「魔力が空っぽだから約束は出来ない。せめて刀があれば別だけど」

刀に関してはうっかり自分を斬らないように気を付ければ、何ら問題なかった。理由は喧嘩でよく、敵の金属バットとか鉄パイプを奪ってボコボコにしてたら、そういう風に振り回すものなら何でも使えるようになっていた。

これだけだったら棍棒といった打撃系の武器を使うのが妥当だろう。

「何で刀なの？」

「打撃系の武器で戦うより、ダメージが大きいだろ。それに、俺は

力が弱いんだ。昨日は魔法で何とかしてたけど。ってかここはどこだ？」

「今更……。あんた、昨日私を船まで運んでから気絶したの、覚えてる？」

「ああ」

「宿屋よ。お金は船長が出してくれたわ」

ここは港からそう離れていない所にある宿屋の一室。

この世界に来て、初めて訪れる街。自分の居た世界と、どのくらい違いがあるのか気になる。

それと、あの男が言っていた『存在するはずの無い者』と、自分そっくりの奴が言っていた、「偽りの鍵」。この二つの意味が知りたい。世界を旅すればこの言葉の意味を知ってる人に会えるかもしれない。

まずはこの街で聞き込み——と行きたいところだが、誰かにそう言われた時に問い詰めた方が、聞いて回るより確実だ。それに、命を狙われてるんだったら、向こうから来るのを待つのもいい。

「あんたが寝てる間にいろいろ調べておいたから。ギルドは全国に50箇所。それぞれギルド名があるけど、多いから言わないから。依頼の種類は魔物の討伐や盗賊、殺人犯の捕獲、場合によっては殺すのも許可されてるようね。ただ、なるべく殺さずに捕らえること。街で戦闘になる場合は建物をあまり破壊しないように。騎士団の牢で一日二日は過ごすことになるから。他には、位の高い人間に取り上げられた大切なものの奪還だったり、落し物を探したり、行方不明の人間の搜索、脱走した動物の搜索及び捕獲、子どものお守り、

清掃………etc」

「凄い種類多いな」

「まだいくつがあるけどね」

雫は半分から三分の二くらいしか種類を言っていない。そんなに依頼があるとなにするか悩んでしまう。

「私達がこれから行くギルドは、評判はそこそこの輝きの森。グロウフォレストそこ

でギルドに登録したら、依頼を他のギルドで請ける事は出来ないから。仮にも私達は輝きの森のメンバー一員。そこで依頼を受けて、依頼人の所で依頼内容を詳しく聞く。依頼を解決したらもう一度依頼人の所に行って報告すれば終了。お金はギルドからの仲介料五分の一を引かれた残りが私達の分。と言っても、クエストボードに貼られてるのはその分の料金が引かれたものだから。名前が売れるようになる、個人依頼とかも来るからかなり稼げるわよ。個人依頼は仲介料はないしね。さっき言った他ギルドからお願いされる事もあるから」

「ふん」

「ま、後は依頼をこなしながら覚えていけば大丈夫でしょ。私も人に聞いた話をそのまま言っただけだから、完全に理解してるわけじゃないの」

一通りの説明を終えた雫は一息吐いた。蓮はそう言う話が苦手なのか、ほとんどの内容を右から左へ聞き流していた。その間、一言も喋っていない睡蓮は――

「私、空気になってる……………」

部屋の隅っこで落ち込んでいた。

ギルド、輝きの森受付（一階）。

人数はおよそ三百六十五人。その中で、戦闘員と非戦闘員の割合はおよそ七対三。非戦闘員の一部は事務仕事を、また一部は一階で

開いている酒場でコックやウェイターとして働いている。酒場と言っても、いろんなメニューがある。他は、戦う事の無い依頼を受けている。

そこは、主にギルドメンバーが情報を交換し合ったり、チームを組むためのメンバーを探すのに利用している。一般市民も自由に入り込んでいる。

依頼内容の書かれた紙が貼られているボードは一階と二階に有り、一階の方は比較的安全なものを、二階は戦闘が主な危険なものを取り扱っている。クエストはDからSSSまでであるが、噂では更に上があるらしい。

ギルドメンバーとして登録してすぐは、Sランク以上のクエストを受ける事が出来ない。たくさん依頼をこなし、マスターに認められたものだけが昇格試験を受けられる。それに受ければSランク以上のクエストも受けられるようになる。

「以上がギルドのシステムです。魔法を使えない人でも、戦闘が主な依頼を受けてる人も居ますよ。極僅かですが」

受付の女性から丁寧な説明を聞いた。

「今は魔力が空なだけだ。魔法が使えないわけじゃねえぞ」

「余計な事は言わなくていいから。私たちには家が無いので、住所を書く事は出来ないですけど、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫ですよ。ギルドには孤児も居ますから。十歳未満の子は三階の別施設で暮らしながら訓練してます。ある程度成長したら寮に移動してもらってますが。皆さんは寮でよろしいですか？」

「ええ」

紙が五枚渡される。雫が五枚全部に全員の名前を記入した。蓮と睡蓮、ウルはこの世界の文字を書けない。ホープも書けるが、人前

で人間の姿に変わる事は雲に止められている。ウルも同じだ。

「水無月蓮さんに神藤雫さん、花咲睡蓮さん、ウル、ホープですね。登録に暫く時間が掛かりますので、暫くギルド内を見て回るといいと思いますよ。終わったら呼びますので、こちらを持っていてください」

そう言つて渡されたのは、淡い水色のガラス玉が嵌め込まれた腕輪。それを三人を付け、二匹は三人の内誰かに付いて行く——と言つても、元から決まっているようなものだが。

「腹減つた……」

「そう言えば、蓮は昨日の夕方から何も食べてないもんね」

「その前の朝からだ」

「つてことは……二日間何も食べてないの!？」

驚きの声を上げる二人に小さな声で「うつせえな」と、悪態を吐くが、それが普通の反応だな、と認める。

飲食店も入ってるから何か食べようと思つたが、金が無い事を思い出す。それ以前に、文字が読めないからメニューを見ても何があるのかさっぱり。頼む事すら出来ない。

「お金だつたら少しあるし、何か頼む？」

「あるの?!」

「船長さんが、『怪物から船を守ってくれたお礼だ』ってくれたの」

とにかく空腹を満たせる事に喜び、席に座る。

メニューは読めないため、雫が適当に頼んだ。メニューの名前とかは元居た世界とあまり違いはなく、文字を読めるようになれば大丈夫だつた。

雫がサイダーを三つ頼もうとした時、蓮は炭酸は飲めないと行ってコーヒーに変えてもらった。

「お前ら新入りか？」

彼らに話しかけてきたのは、がたいのいい二十代半ばの男。髪は赤茶色で瞳は赤。右手の人差し指と中指には指輪が嵌められていた。指輪からは僅かにだが、魔力を感知できた。

「そうだけど、新人いびりか？」

「いやなんでそうなるんだよ。自己紹介くらいするだろ、普通」

蓮はめんどくさそうに視線を逸らす、睡蓮と雫は挨拶をした。

「私は花咲睡蓮。こっちはウル」

「クウーン」

「私は神藤雫。この子はホープ」

雫に紹介され、ホープは右前足を上げて挨拶をした。

「俺はイル・バーン。お前の名は？」

「……水無月蓮……」

イルを一瞥し、すぐに視線を逸らす。この騒がしい場所で、呟くような小さな声でも聞こえたようだ。

（何で、あいつと重なるんだ……？）

イルと重なったのは、先日襲撃してきた少女の仲間。見た目は全く違う。なのに、何故か重なった。

ひたすら思考を続けていると、腕輪に嵌め込まれたガラス玉が光り出した。登録が終わったようだ。

「わり。俺、腹減りすぎて動けないから、お前らで行ってくれ」

「仕方ないわね」

そう言っ、雫は白銀色の表紙の本を取り出した。魔力が流し込まれると同時に、ページが一気に捲られる。

「聴覚共有^{リンク}。私が聞いた事が、あなたにも聞こえるようにする魔法よ」

「あんがとな」

お礼を言っ、テーブルに突っ伏す。二人は受付に行き、ホープとウルが蓮の護衛代わりに残った。

蓮が命を狙われてるっ、事が前日分かっただけあり、魔法を使えない彼を一人にするつもりはないようだ。だが、雫の場合それは建前。本音を言っ、信用できない。得体の知れない存在を信用するほど、彼女は甘くなかった。

「コーヒーとサイダー二つです」

「置いといて……」

ウエイトレスは飲み物を置いて下がった。

一応反応はしたが、ちゃんと聞いていたわけではない。今は耳から別の会話が聞こえているため、そちらに意識を集中させているのだ。

『昔はギルドメンバーの証として、カードを発行していたんですが、盗賊に盗まれたり、どこかに落として紛失する事が多発したため、

体のどこかに魔法のスタンプを押しています。それは見えないところでも構いません。それがなければメンバー以外が依頼を受ける事は出来ません。説明は以上です。もう一人の方は？」

『空腹で動けなくなってます』

睡蓮と雫の苦笑してる顔が頭に浮かんだ。だが、実際に動けないんだから仕方が無い。

おそらく、今日から依頼をやるはず。宿屋では、武器として刀が欲しいと言ってしまったが、魔法による身体強化が出来ない今の自分が扱いきれるかどうか不安だった。それだけじゃない。殴り合いとかの喧嘩ならした事はあるが、命が掛かった戦闘は昨日が初めてだ。しかし、魔法が使えた分、今よりはマシ。問題は、いつ魔力が戻るか分からない身で、今後彼女らの足を引っ張らずに戦えるかどうか。

『それじゃ、彼のところまで移動しましょうか』

どうやらこっちに来るようだ。

伏せていた顔を上げ、周囲を見渡す。店は賑わっていて、ざっと二百人は居る。一般人とかも普通に出入りしているらしいが、大半がギルドメンバーだろう。

依頼を受けてここに居ない者も何人かはいるはずだ。

「蓮くん、大丈夫？」

ギルドの受付に居た女性が聞いてきた。

聴覚共有を切っていないようで、二人分の声が聞こえた。

「雫、魔法解いて。変な気分になる」

「忘れてた」

声を出して魔法が解かれているか確認し、女性の質問に答える。

「空腹で死にそう」

「元気そうだから大丈夫って事で。二人には説明したけど――」
「大丈夫です。スタンプってどんなのですか？」

この説明はしてないはずなのに、どうして分かったのか疑問に思った女性に、雫が聴覚共有という魔法のことを説明した。

「そんな魔法があるの。初めて知った」

「特殊ですから」

「それより、スタンプは？」

「あ、ごめん。これよ」

見せられたものは絵が彫られた普通のスタンプ。彫られている絵は三本の木。ハッキリと見えるのはそれだけだが、奥の方にも続いているのが分かるように彫られている。

「このギルドが輝きの森って言う名前なのは知ってるよね。だからこういうスタンプなの」

「輝きの森……」

そう呟いて、ギルド内をもう一度見渡した。その呼び名が似合うほど、みんな活き活きして見えた。自分には眩しすぎる場所だ。

「みんなはどこに押す？」

「背中。右肩寄り」

真っ先に言ったのは蓮だ。シャツを捲って背中を見せる。

「色は何色がいい？ 何色でも平気だよ。透明は無理だけど」
「灰色」

このスタンプは、音声に反応して色を変えてくれる。だが、押そうとした時に別の色名が聞こえ、それに反応したら困るため、受付の人間がギルドマスターの声にしか反応しない。

蓮にスタンプを押し終わり、次はウルとホープ。流石に、その姿でスタンプを押すのは止めとこうという事で、人間の姿になる。

「え?!」

「ま、普通は驚くよな」

雫から聞いた話では、この世界には「獣人」や「亜人」は存在しないそうだ。ファンタジー系の漫画やゲームではよくある設定だから、この世界にも居るのかと思っていた。

「軽く説明すると、偶然発動した魔法で町か村に行つて、そこで言葉と魔法を勉強して人間と同じくらい頭がよくなった狼と狐」

「そんな事であるの?」

「実際に目の前で起こってる」

人が動物に変身する魔法は知っているが、動物が人になる魔法は初めて知った。

実のところ、雫の説明は100%嘘。本当の事は説明出来そうに無い。言っても信じてもらえない——今では御伽噺おとぎばなしだから。

「右腕に押して。色は黒」

「左腕に押して。色は白」

「右腕に押して」と言ったのがホープで、「左腕に押して」と言ったのがウルだ。ほぼ同時に言ったため、まともに聞き取れなかったが、二人は押してもらいたい方の腕を出してるため、簡単に分かった。

「キミが黒で、キミが白だよね？」
「うん」

間違えの無いように確認を取り、スタンプを押す。あとは睡蓮と雫だけ。

「私は右手の甲。色は漆黒」
「私は左手の甲。色は白銀」

雫は右手に、睡蓮は左手にスタンプを押してもらった。これで、五人は正式に輝きの森のメンバーになった。

「本当なら、マスターにすぐ挨拶をするんだけど、今日の朝から暫くギルド連盟の集会で居ないの。帰ってくるのは明後日の夕方頃って言うてたわ。依頼はもう受けても平気よ」

女性はそう言って受付に戻っていった。

その直後にさっき雫が頼んだメニューが全部届いた。サラダとパスタ、サンドイッチ。それぞれ二人前よりすこし多いくらいあり、皿に取って分けるらしい。とにかく、早く食べたい蓮はサンドイッチを一つ取り、食べる。

「本当に二日間何も食べてなかったんだ」
「それで、あの高威力魔法ともの凄く繊細な魔力コントロールが必要な幻術。おかしいでしょ」

「鏡花水月の説明はほとんど嘘だ。あれは踊る人形も光と闇を操る必要も無い。直接脳に催眠を掛けるんだ。100%成功すると言ってもいいな」

本当に規格外な奴。心で思っても声には出さない。雫が周りの人間と仲良くするために学んだ事だ。

（二度と、あんな目に遭うのは嫌）

食事も終わり、クエストボードに行こうとして、声を掛けられた。

「嬢ちゃんたち、もう登録は済んだんだな」

聞き覚えのある声。振り向くと、いろいろよくしてくれた船長が居た。

「頼みたい仕事がある」

とても真剣な顔。仕事だから真剣なのは当たり前なのだが、そういうのとは少し違う。何かに恐れているようにも見える。それを必死に隠しているような、そんな表情に見えた。

t o b e c o n t i n u e d

6話（後書き）

睡蓮が海岸に居た理由は、次回分かります。

7 話（前書き）

前回より短いです。

少し読みづらいところがあると思います。

後書きにはアンケートもあります。

本編をどうぞ。

7話

五人は今、船の甲板の上に居た。蓮は手すりに寄りかかり、ウルとホープはその隣で動物形態になって寝ている。睡蓮と雫は蓮と向き合うように立っている。

何故、そんな所に居るかという、理由は船長からの依頼にあった。

「あの船長、俺らを高く買いすぎじゃね？」

「それだけ実力が認められてるってことよ」

「それに、依頼の報酬が凄いいしね。刀はもう、実戦で使える？」

彼らが受けた依頼は、港町『クダラ』から南東に半日ほど進んだ所に位置する小さな島までの護衛と、そこに住んでる凶暴な魔物、ゲートの討伐。

クダラは、数分前まで彼らの居た町の名前だ。

報酬は二十万Q。^{クイート}前払いとして刀も貰っている。

「扱いは大体慣れた。あとは実戦で何とかしてきやアいいだろうし」「そう言えば、どうして睡蓮たちがあそこに居たのか聞いてなかったわね」

「私とウルはククルの森で出会って、そこから南西にある村に行くことになったんだけど、間違って反対方向に出ちゃって。そこで大きな魔物二体に襲われて、倒した後その場で寝ちゃったの。で、起きたら光の柱が見えたから、そっちに向かったら三人が居たの」

（偶然か？　だが、偶然にしちゃ出来すぎて。まるで、何かが俺たちを引き寄せてるみたいだ）

前日は特に気にしなかったが、今になって思えば変だった。この

世界に飛ばされた翌日に、知ってる人物二人に会った。

雫は一日遅れてこの世界に来た。二つの術式を急いで組み合わせた事で飛ばされる場所がずれただけじゃなく、時間にも誤差が生じた所為で。

蓮は二人より一日遅れて飛ばされたのに、睡蓮と同じ日に来た。時間を一日遡つてだ。

この事が分かったのは、三人が飛ばされた日を話したからだ。

「深く考えても答えは出ないよ」

「分かつてる。ってか俺、声に出してたか？」

「顔に出てた」

「そか」

前より感情が出るようになったな。

少し驚きはしたが、表に出さないよう努める。海上での護衛戦に蓮も参加することになった。睡蓮に海を凍りつかせてもらい、その上で戦えばいいだろうと、蓮から提案があった。船長は、「流石に魔力が持たないだろ」と言ったが、本人が大丈夫と言い張った。

「来たか……」

海中から魔物が一斉に飛び出してきた。それに驚く素振りも見せず、海に身を投げ出す。

「凍てつけ……」

海上の気温が一気に下がった。海面は凍りつき、これから飛び出そうとしていた魔物は頭を氷に打ちつけた。船の上は気温の変化はない。

蓮は腰に提げてる刀に手を伸ばして鞘から抜き、近くにいた魔物

を斬り捨てた。

体勢を空中で立て直し、キレイに氷の上に降り立った。

氷の上に居る魔物の数はざっと百体。まだ海中にたくさん居る。

戦っている間、船はどんどん遠ざかっていくが、問題はない。睡蓮が海面を凍らせて道を作ってくれる。

それに、戦うのは一人じゃない。五人で一気に片付ける。近接向きの蓮とウル。近・中距離向きの睡蓮。サポートタイプ援護型の雫。サポートといっても、一人で討伐ランクSの魔物を倒せるほどの実力を持っている。

船からは一時間毎に発炎筒を上げてもらうことになってる。

種類は鯨が二足歩行出来るようになった姿みたいな魔物や、力二の様な魔物の二種類。

「魔物の群れってのは、束ねてる奴がいるんだよな？」

「ええ。そいつを倒せば群れは乱れて倒しやすくなるわ」

「見分け方は？」

「種族によって様々だから分からない」

「なら、風漬しに倒してくしかねえか」

刀を納刀し、柄に手を掛けた状態で駆け出す準備をする。

「左右と真ん中に分かれて戦わない？」

「じゃ、俺は真ん中な」

「僕は左」

獣人形態になり、爪を鋭くして構える。眼光は群れの左側を捉えている。

「私は右か」

睡蓮は平然とその場に立っている。構えは無い。でも、近づけば一瞬で命が刈り取られる雰囲気、魔物は近づいてくる事が出来なかった。

「魔力放出しすぎじゃない？」

「大丈夫。この数相手だったら余裕あるから」

「余裕ぶっこいてんと、足元掬われん、ぞ！」

言い切ると同時に三人は一斉に駆け出した。

右に行く睡蓮は、両手に氷の剣を纏わせ、更に紫電を全身に纏って身体能力を強化した。

「ごめん……」

すれ違いざまに魔物を斬り捨てる。一言謝ったのは、彼女が優しいすぎるからだ。争いごとには向いてない性格。それでも――

（睡蓮は鍵の一つ。生き続ける限り、輪廻を繰り返す限り、争いから抜け出すことは出来ない。どんな世界でも）

（生き続ける限り、誰だろうと争いから逃げられない。どんな世界でもだ）

雫と蓮。考えてる事は多少違えど、根本は同じだった。

「刀、やっぱり重い……な！」

下段から斬り上げ、数体同時に倒した。

蓮は必要以上に倒そうとせず、魔物の中心に向かう。その行動には、ある考えがあった。

地面が大きく揺れた。真下には巨大な影。それを見て、蓮は不敵

黒い雨が魔物の身体を貫き、地面を貫通した。
よく見ると、自分の居た場所だけ雨は降っていなかった。

「ホープ、睡蓮とウル以外、全部倒すよ」

「それは、蓮も……？」

「うん。ハッキリ言っ、危ない。私達も巻き込まれて死ぬ可能性
がある……」

キツ、つと睨んで、足元に魔方阵を展開する。

「本気で行くよ！」

「分かった！」

ホープの身体が光に包まれる。ウルと同じ獣人形態になるのでは
なく、一冊の、白銀に輝く綺麗な本になった。

『飛行魔法はこっちで行う。思う存分、暴れていいよ！』

「そのつもりよ！」

白い拳銃の銃口から、黒い魔力の刃が伸びる。ページを凄い勢いで
捲り、あるページから十ページほど魔力を流し込み、一つの魔法
を発動させた。

「っ！？」

背後に感じた気配に驚きつつも、刀を抜いて迫ってくる刃を防い
だ。

「敵はあつちだろ……」

「あんたは危険すぎる。だから、今は眠って……。ダガー・ブラ

スト！」

引き金を引く。刹那、銃口から刃が切り離された。それを半歩身を引いて躲し、刀を押さえ込むのに力を入れてた分バランスを崩し、よろけたところに腹に拳を叩き込んだ。

「うつ……！」

肺に溜まってた空気が少し吐き出される。

「何で、すぐに反応できたの……？」

「知るかよ」

蓮は、戻りつつある魔力を感じていた。チカラ少しずつではあるが、確実に戻ってきている。刀を鞘に納め、抜刀の構えをとった。

「しゃがめ」

冷たい雰囲気——さっきよりも冷たくなった雰囲気に、動けなくなる。

雫は、目の前に居る存在が悪魔に見えて仕方なかった。あまりにも惨酷な事を、涼しい顔をして行う蓮が、悪魔よりも悪魔らしく、誰よりも——

「黒刃衝！」

氷の上を、黒い魔力が覆い尽くした。

怖かった。身体の震えが収まらない。あれで、魔力が空になる前の半分。それを聞いただけで、前と同じ状態だったら？ 全開だったらどうなるの？ 悪い考えばかりが頭をよぎる。

勝てる気がしない。一生掛かっても、勝てない。正真正銘の化け物だ。悪魔よりも悪魔らしく、誰よりも――

「透明な化け物……」

つい、口に出してしまった。それだけ、あの時の姿に対する恐怖心が大いなのだ。

蓮の魔力は、再び空になっていた。船までは予定通り、睡蓮に道を作ってもらった。未だに、さっきの光景が頭から離れず、顔を青白くしているが。

船に戻った彼らが見たのは、地獄絵図だった。船員のほとんどが吐き気を堪え、ダウンしている。理由は睡蓮と同じだ。

それでも、船は目的地目指して移動し続ける。

「何でみんな、あのくらいの事がダメなんだ？」

「ッー!!」

今の蓮の発言に、完全に切れた雫は銃の引き金を引いた。勿論、実弾の入ってる方を。

「……………」

無言で、雫にプレッシャーを掛ける。触れる事も、近づく事さえも許さない瞳。魔力の無い、ただの人間。刀の扱いもままならない、同い年の少年に、震えが止まない。

「何で、そんな事平気で言えるの……!?!」

雫の代わりに口を開いたのは、睡蓮だった。零れる涙を拭く事もせず、声は小さかったけど怒ってるのは分かった。

「平気だからだ。俺からしちゃア手前らの方が変だ」

そう言っ、甲板の手すりの前に座り、背を預けて眠った。

「睡蓮……」

「ごめん、ウル。暫く一人にして……」

なるべく優しい声で、しかし、表情は悲しみを孕んだ笑顔で言い、自分達に割り当てられた船室に入っていた。

「ホープ、暫く眠るね」

「うん。着いたら呼ぶから」

雫は誰も見てない事を確認し、ホープに触れた。身体が徐々に透けていき、やがて、光の粒子となってホープに吸い込まれた。

「ここは——またか。」

『今朝来たばかりだったのに、よく来るなア』

へらへら笑ってんじゃねえよ。俺の顔でそんな表情されると気持ち悪いんだよ。

『さっさと酷い事言っね。ま、いいや』

めんどくさい。何でコイツは、こんなにも明るい。昨日と別人じやねえか。

『それにしても、いきなりバラバラだね。このままいくと、みんな死んじゃうよ』

別に構わない。他人の死なんざどうでもいい。

俺自身、死ねるんだったら死にたい。解放されたいんだ……無限の地獄から。

『ほんと、変わり者だよ、キミは。でも、そういう訳にはいかない。死んでもらっちゃ困るんだよ、この先の事を考えたら』

手前はなんなんだ？ 俺自身と言うには、随分性格が違うじゃねえか。

『言葉どおり、君自身だよ。もっと言うと、キミの性格の一部。壊れたキミが自分を守るために作った存在だよ。五つに分けたうちのね』

性格の一部？ 五つに分けたうちの一つ？ 訳分かんね。

『記憶を戻せば分かるんだろうけど、今はその時じゃないしな。今は“ココロ”を学んでもらわなきゃ』

ココロを学ぶ？ 学んで何になる。何の役にも立たねえ、邪魔なだけだろ。思考も動きも鈍らせる邪魔なものだ。

『ぶ……クク……、あつはははは！！』

何が可笑しい？

『いや、この世界に来た時と、別人だからさ』

それを言うなら、手前だってそうだろ。俺と会った時と別人じゃねえか。

『あれは、一時的に五つのココロを一つにただけさ。あれが本来、キミがあるべき姿だからね。それにしても、変わったのはキミだよ』

俺のどこが変わった？

『キミ、最初から死にたくないって思ってたの、覚えてる？』

あ？ 俺はずっと死んでも構わないって思ってたけど。

『高い所に放り出されて、森に向かって落ちてった時、死にたくないから最低限、身を守る事をした』

そつえば……

『魔物に襲われた時、「死にたくない」ってハッキリ言った』

言ったよ。言ったからなんだ？ 何が言いたい？

『今のキミと矛盾してるじゃないか。死んでも構わないと思ってる今のキミと、死にたくないって思ってた過去のキミ。正反対じゃないか』

それが？ 全く正反对じゃねえじゃん。

『へ？』

“死んでも構わない”と“死にたい”がイコールだとも言いてエのか？

『違うのか？』

違エよ。矛盾だらけだけど、俺は生きたいわけでもねえし、死にたいわけでもねえ。どう転ばうと構わない。仕方がねえ事だからだ。

『フフ……やっぱり面白いよ、キミは。託して正解だったかもね』

はア???

『壊れたキミってのは、何も今のキミのことじゃない。ずっと昔の——別のキミの事さ』

訳分からん。

『分かんなくていいさ……。さあ、もう戻った方がいい。そろそろ島に到着する時間だ』

錨が海中に下ろされ、船が止まった。

ちよつと目が覚めた蓮は、慌しい船内を見渡した。

「小舟に乗って島に移動するから、お前も準備しとけ」

船員に声を掛けられ、船体の向いてる方を見る。確かに島はあったが、見える限りじゃ森しかない。こんな所の魔物を討伐して何の意味があるのだろうか。

「おはよう、蓮くん。ゆっくり眠れた？」

船室から出てきた睡蓮が声を掛けてきた。一晚中泣いていたのか、目は赤く、腫れぼったくなっている。

「酷^{ひど}エ顔だな」

「蓮くんのせいだからね」

「はいはい。これで冷やしとけ。戦いに支障が出るぞ」

いつもと違って優しい蓮に多少驚くも、あまり気にせずに渡された氷で目を冷やした。

「この氷、どうしたの？」

「いつの間にか戻ってた魔力を使っただけだ」

腰に提げた刀を鞘から抜き、切先を島に向ける。無駄な事は一切考えない。必要なのは――

「襲ってくる奴ア、全てぶった切れば終わりだ」

「そういう短絡的な思考が羨ましいよ」

睡蓮は苦笑して言ったが、まだ、心のどこかではさっきの事を引き摺っていた。それでも、それが彼の短所でもあるけれど長所でもあると思い、あまり気にしない事にした。

「その言葉、使い方あってんのか？」

「違うの？」

「何か違う気がする」

睡蓮は見逃さなかった。蓮が一瞬ではあるが、笑っているところを。それは、本人でさえ気付かないような、小さな表情だった。

7話（後書き）

アンケートです。

このギルドでの生活ですが、あまり大きな事件は起きません。事件は起きませんが、今後の話に関わる大事な伏線を入れるための話なので、絶対に抜けないんです。

そこでアンケート。

この話の間のほかのキャラの状況も読みたいですか？

サブタイトルは外伝として投稿します。

8話（前書き）

言うまでもなくグツダグダです（苦笑）

また一つ謎が増えましたwww

文字数はおよそ三千と、この作品の話で一番短いです（キャラ紹介を除く）。

8話

戦場を駆ける五人の男女。

一人は銀髪の、少女というには大人びていて、大人というには幼く見え、白銀に輝く本を持っている。

一人は赤髪に、二本の剣を巧みに操る男性。

一人は金髪に、魔法を駆使して敵の兵を薙ぎ倒し、時には後方で仲間の援護をしている女性。

一人は黒髪に、弓と魔法を上手く組み合わせて戦っている男性。

一人は青髪に、氷でできた大剣を振り回し、一度に大量の敵を吹き飛ばす男性。

彼らは、一国の王女とその娘を守る特殊な力を持った護衛兵士。

何故、王女が戦場にいるのか。それは、ある人物のもとへ行くため。

（私の、最後の戦の記憶）

戦場は火に包まれ、大量の死体が転がっている。

赤髪は二本の剣を上空に投げ、屈んで左右にいた二人の敵の攻撃をかわした。投げた剣はその二人の背中に突き刺さり、地面に倒れた。剣を抜き取り、戦場を縦横無尽に駆け回り、敵を斬る。その度に爆発し、死体は遠くへ吹っ飛んでいった。

金髪は、火、水、風、地の魔法の術式をそこら中に仕掛け、全体の動きを上空で把握。術式に敵が踏み込んだ直後に魔方陣が浮かび上がり、肉を焼き払い、水で包み込んで溺死させ、風で切り裂き、身体を地面が貫いた。

黒髪は弓矢を魔法で創り、通常の弓では出来ない高速連射をして敵を倒していく。矢には属性が付加されており、当たった瞬間に燃えたり爆発したり、切り刻まれたりしている。

青髪的能力は第二希少属性の氷で、それと並ぶものは雷だ。この中に雷を使える者は居ないが、氷属性が使えるだけでかなり有利になる。理由としては足場の形成、物理攻撃の防御、大地の支配がある。仮に防御が破られたとしてもすぐにカウンター攻撃が狙え、大地の支配は表面を凍らせる事で地属性の魔法が、ほぼ使用できなくなるからだ。

だが、青髪の場合はそれを超える力の使い方をする。氷で出来た大剣を地面に突き刺し、表面だけでなく内部ごと凍りつかせるのだ。戦場には魔物を操る術師が居り、そいつらに従えられている魔物の一部は、大地の中を通して迫ってくる事もある。氷属性はほとんど完全な大地支配を行えるのだ。更に、極寒の地では魔力消費量が半分になる。その反面、火属性魔法には弱く、灼熱の地では魔力消費量が倍になるというデメリットもあった。

だが、それが全く関係ないのか、あちこちで燃え上がる炎ごと場を凍りつかせ、自分の陣地^{テリトリー}にしていく。その範囲内では、主を除いて誰も、彼に逆らう事は出来なかった。

銀髪は、空間転移を行ってわざと敵の中心に行き、攻撃の的となった。だが、攻撃が届く事はない。ギリギリで再度転移し、攻撃を躲したからだ。的を失った攻撃はどうなるか。考えるまでもなく、仲間を殺すだけだ。

実力に差がありすぎた。一介の兵士がいくら束になろうと、彼女らを倒す事は出来ない。

彼女らは陣形を組んで戦っているわけではない。個人で戦場を移動している戦っているのだ。

彼女らは、一人、戦場に放り込まれた子どもではなく、逆に兵士の方が、沢山の子どもが一匹の怪物に挑まされているようなものだった。

（私は、あの人に会う事が出来なかった。だから、二つの国は滅んで、今の世界がある）

場面が一気に変わり、一人の男と戦っている彼女ら五人。男は怪我一つ無い状態だが、彼女らはともに戦える状態じゃなかった。骨が折れ、身体の至る所を怪我していて、魔力がほとんど空の状態。それは全て、彼女らの眼前の男との戦闘でなつた。

「この男にやられたから……………」

ギリツ——と音がするほど、歯を食いしばった。口の中に血の鉄錆のような味が広がる。この味はあまり好きじゃない。

景色に霞が掛かってきた。本人の記憶が、終わるからだ。

（ごめんなさい、エミス。あなたを救ってあげられなくて…………あなたが一番恐れていた事をさせてしまったわ）

「リディア、時間だよ」

少女はいつの間にか後ろに居た銀の狐に呼ばれた。振り返り、悲しみを押し殺すために笑顔を作った。

「ホープ、今の私の名前は雫よ」

「そうだったね」

彼女らを、強い光が包み込んだ。

目を覚まし、ホープの中から現れた雫に気付く者はいなかった。空間転移の応用、空間剥離。空間を歪ませて自分の居る空間とみんなの居る空間をずらし、認識出来なくする魔法。これは自分だけでなく、他人にも掛けられる。逆に自分の姿を認識出来る状態にし

たまま空間をずらす事も出来る。

空は東の方が少し明るくなっているだけで、まだ沢山の方が眠っている時間だ。

出発したのが昨日の夕方頃だから、予定通りに着いたようだ。

「今回は、離れたりしないからね……………」

これから行く島を、蓮の隣で眺める睡蓮を見つめ、呟いた。ウルはその足元で眠っていた。

「雫……」

「分かってる。気持ちを切り替えなきゃね……………」

少しの間目を閉じ、思考を切り替える。あくまで、今の自分は、昔とは全くの別人。過去にばかり思いを馳せていられない。

徐々に空間の歪みを直し、二人の傍に、静かに歩み寄った。それでも、蓮はすぐに気付いたが。

「はよオ」

「おはよう、二人とも」

「おはよう、雫ちゃん、ホープ」

「おはよう」

それぞれ挨拶を交わし、島を見た。島から立ち昇る不穏な空気に、皆、緊張する。

「今回の依頼、厳しいな」

「アクレピオスを倒した奴が言う?」

「ゲーテって魔物のこと、調べてないのな……………」

自分以外全く調べて無いことに、ため息を漏らす。

「アクレピオスの弱点は陽の光。知ってると思うけど、太陽は恒星だ。光を発する小さな星もな」

「それくらい知ってるわよ」

「レイは、星々の光を収束し、天から降り注ぐ魔法。その力の前ではアクレピオスは討伐ランクAAとも言える弱さになる」

予想外に蓮が頭が良い事に、三人は驚きを隠せなかった。なにせ、蓮は授業中ずっと眠ってるのだ。テスト中も寝ていて、学力は不明。クラス誰もが、馬鹿だと思い込んでいた。

「何か馬鹿にされてるような気がするけど、ま、いいか。話を続けるぞ」

「うん」

「ゲーテは、弱点となる属性が無い」

「え？」

「光と闇……それが、ゲーテの属性だ」

雫とホープの目が見開かれる。

光と闇は対となる属性で、光は闇に弱く、闇は光に弱い。相対する二つの属性を持つ魔物は居ないのが、この世界では常識だ。

「ゲーテは魔界から来たと言われてる魔物で、存在自体が珍しいみたいだし。姿は人型だけど、皮膚は白くて、所々に黒いラインが入ってる。二本の黒い、牛のような角を生やしていて、背中には一對の白と黒の翼がある。様子だけを思い浮かべたら、堕天使のようだな。大きさは五メートルくらい。討伐ランクは測定不能だったはず」

「なっ!？」

「嘘っ?!」

測定不能——それは、規定値を超えた強さを持った魔物であるという事。幻想の魔物と呼ばれる存在だ。

「本当に存在するのか分からない魔物。今では空想上の存在とまで言われてる。最後に確認されたのは二百年以上も前らしいし」

それだけでも、どれだけ希少な存在か分かるだろう。
戦って勝てるのか。一同に不安が募る。

「ま、戦ってみりゃ分かったら。データも相当古いんだし」

「そ、そうだよな」

「おい、お前らも小舟に乗れ。島に上陸するぞ」

話が終わったところで船長に声を掛けられた。

一番空いてる小舟に乗り、戦いに備えて集中力を高める。

(この胸騒ぎ…何なんだ?)

みんなはまだ知らない。この依頼が、今後の出来事に大きく影響する人物と会おう事を……

9 話（前書き）

なかなか文章が良くならない。

毎日訂正しながら少しずつ書いてるのに……

9 話

森の中をひたすら進み、遺跡の入り口に辿り着いた。
途中襲ってくる魔物は居なかった。

「止まれッ！」

蓮が大声でみんなに静止を呼びかけたが、間に合わなかった。睡蓮が遺跡の中に足を踏み入れた瞬間、島全体に魔方陣が浮かび上がった。

「な、何？」

「結界魔法だ。遺跡と島を隔離したんだよ」

「ど、どういう事だ？」

まだ分かんねえのか——と悪態を吐き、分かりやすく説明する。

「まず、遺跡の出入り口に魔法で壁を作られた。破壊するのは不可能だ」

「そ、それって……私が閉じ込められたって事？」

「いや、違う。お前だけは傷付けないように隔離されたんだ」

何故なのか全く見当が付かない全員は、疑問符を浮かべた。蓮は面倒くさそうにため息を吐き、口を開く。

「遺跡の奥からお前に似た力を感じる。それと関係あるんだろ。もう一つ、とても危険な気配もする。そいつがこの結界を張ったはずだ」

淡々と言う蓮に、みんな驚きを隠せない。常人離れした気配察知能力と、考察力。全て仮定の話だが、それらを真実に思わせるほど、短時間で蓮は信用を得ていた。

「睡蓮、奥に行つて敵を倒して。何が居るのか、大体予想は付くけど」

「ゲーテ……だよね」

ゲーテ。世間で知られてる中で、最強の魔物。討伐された記録は一切無い。

蓮が、睡蓮の傍に歩み寄る。腕を伸ばせば触れられそうな位置。だけど、見えない壁が間にあり、邪魔をする。

「睡蓮、お前は何のために戦う？」

「護るため……。私の身の回りの存在全てを護るため」
「だったら、ゲーテを倒して俺らを護ってくれ」

森がざわめく。無数の足音が、迫ってくる。

蓮は刀を鞘から抜き取り、地面に突き刺した。

「うん！」

睡蓮は笑顔になり、遺跡の奥に消えていった。

「はあ……俺らしくねエな」

他人と話すのは苦手だ。今までずっと避けてきた。なのに、最近
は良く話すようになった。たった数日しかこの世界で過ごしてない
のに。

「おい、お前らは一箇所に集まって防御壁でも展開しろ。最低でもSランクの攻撃でも防げるぐらいのを」

「それは構わねえが、三時間も持たねエぞ」

船長の言葉に、視線だけを送る。分かつてる——そう目で伝え、地面に刺したままの刀の柄を掴み、抜き取る。

「ウル、雫、ホープ、睡蓮が戻ってくるまで持ち堪えんぞ！」

「うん！」

「ええ！」

森の中から無数の魔物の群れが現れた。種族は様々。全く統一性が無い。

異常。本来ならありえない光景だ。

「ダンシング・ドール
踊る人形・リーフスラッシュ！」

無数の木の葉が宙を舞い、魔物を切り裂いた。だが、傷は浅く、倒すまでには至らない。

「グランド・スパイク！」

大地が隆起し、石針が飛び出して魔物を貫いた。

傍目に見れば再起不能な状態の魔物が数体居る。だが、頭を貫かれた魔物以外は石針から抜け出し、すぐに傷口が塞がった。

「へエ」。お前、驚かないのな」

「前にも見た事があるからね」

真っ先に反応しそうな雫やホープ、ウルが無反応。不思議に思っ

た蓮は雫にだけ聞き、他の二人も同じと思って聞くのを止めた。
今は目の前の敵に集中する事が大事だ。

蓮とウルは大地を蹴り、魔物の群れとの距離を一気に詰めた。
雫は白と黒の銃をバラし、白と黒の二色で出来た二丁の銃を、魔物の群れに向けて狙いを定めた。

「ツイン・ブラスト！」

放たれた黒と白の魔弾。小さく、細く、鋭く——貫通力を追求した魔弾は、十数体もの魔物を貫き、一体のゴーレムの腕を砕いて消えた。

魔物の中心で蓮は、二本の魔法刀を使って魔物を斬り伏せる。
ウルは獣人形態になり、鋭い爪で魔物を切り裂く。

だが、どんな致命傷を与えても、すぐに再生する。唯一再生しなかったのは、頭を斬り落とした時だけだった。

「弱点は頭だ！ 頭を狙え！！」

「分かったわ！」

ホープは船長達と一緒に防御壁を張り、自分の身を護っていた。
魔物の群れが現れる直前に雫が、「みんなのサポートをして」と言われていたのだ。

「面倒くせエ……ウル、手伝え」

「何を！？」

周囲の魔物を薙ぎ払い、ウルのところまで移動する。
周りに聞き取られないよう、小さな声でこれからやる事を説明した。

魔法刀を消して雫よりも後ろに下がる。

「分かった！」

「零、一分——いや、三十秒だけでいい。時間を稼いでくれ」

「何するか分からないけど、やってやるわよ！」

無数の光球が壁のように、眼前に展開される。魔物が触れるたびに爆発する。

——フォトン・ウォール。

これなら一分どころか三分間、敵の攻撃を一切受けなくて済む。

「大地よ、この地を荒らすモノへ怒りの鉄槌を下せ！」

灰色と漆黒の巨大な魔方陣が重なった。

二人の声に答えるかのように大地に罅が入り、隙間からは光が溢れ出ている。

魔方陣の輝きが増し、二人がギリギリ入りきれくらいまで収縮していく。

『大地の咆哮！！』

魔方陣から地中に向けて魔力が放出された。

地面が砕け散り、大きな破片が一部の魔物を上空に打ち上げ、残りの魔物は穴に挟まっていた。

「フォトン・ランス——レイン」

降り注ぐ光槍は、足場が崩れて身動きの取れない魔物の身体を貫き、爆発する。

爆発して霧散した魔力素が、再び爆発した。

「チェイン・エクスプロージョン」

爆発によって砂煙が舞い上がり、別の爆発によって消し飛ぶが、またすぐに砂煙が舞い上がる。

そんな事が一分以上続き、爆発が収まった時には魔物はほとんど消えており、砕けた地面は直って、代わりに小さなクレーターが出来ていた。

何だろう、この感覚。

敵を倒すたびに、身体の内側が暑くなる。

この感覚、前にも……。そうだ、不良に絡まれて、ボコボコにした時と同じ感覚だ。

この感覚が気持ちよくて、止まれなくて、気付いた時にはそういった時と同じ感覚だ。

息はしてたけど、立てなくなって、つまらないから帰ったんだ。

「ハハハ……………」

止まらない。

俺は、狂ってるから。

さっきまで平常で居られたのが不思議なくらい、今は、目の前の魔物おもちゃが壊れるまで、止まらない。

刀を鞘から抜いて、地面を蹴ると同時に魔力を放出。一歩で数十メートルもの距離を一気に詰めて、刀で斬った。

同時に、身体の内側で熱が暴れる。

今の俺は、獣だ。

理性の無い、本能の赴くままに暴れる獣。

残った魔物おもちゃと、壊れるまで遊び続けた。

周囲の視線なんて気にならない。

最後の魔物おもちゃが壊れたと同時に、熱は引いていった。

直後に俺を襲うのは空虚——虚しさ。

後ろを振り返ると、みんな震えていた。

自分じゃ、どんな表情をしていたのか分からないけど、唯一分かっている事は、狂ったように、笑っていた事だけ。

「この結界を解く方法、他にもあるかも知れねえから、俺とウルで手分けして探してくる」

「え、僕!？」

「接近戦が主なお前が、みんなを守れるのか？ それだったら、魔物と一定の距離を保って戦える雫のほうがいいだろ」

「う、うん。確かに」

案外簡単に納得したな。

睡蓮の事があるから、最後まで折れないと思ってた。

「睡蓮は大丈夫よ。魔力のコントロールは下手だけど、私より強いから」

雫がウルを安心させるように、優しく言葉をかけた。

魔力コントロールが下手なのは俺も一緒だ。ただ、無駄に力を使う事が多いだけだし、使わなきゃコントロールも上達しない。

一人で行かせた分、戦闘が大変になるけど、使用する魔力量も考えるようになるだろ。

俺から探しに行くって言ったのにはもう一つ理由があつて、みんなを傷付けないためだ。

戦いが長引けば長引くほど、俺は理性を失っていくから。

「お前はそつちからな。俺はこつちから行く。三時間後、ここに集合な」

「分かった」

「念のため、これを持って行って」

そう言って渡されたのは、術式が書かれた紙。

「それは連絡用よ。魔力を流し込めば私に繋がるようになってるわ。何かあったら使って」

「あいよ」

「行ってくる」

連絡するのは、迷った時で構わねえか。

森の中に一步、足を踏み入れる。

不思議な感覚だ。

今まで舗装されて無い道を歩く事なんて無かった。

日本じゃ、雑草が生い茂っていても、足場は平らで歩きやすいようになつてゐる場所ばかりだ。

でも、ここは違う。

未開の地と言つてもいいほど、足場は不安定。歩くのも大変なのに、魔物に襲われたらもつと大変だ。

それと、島全体を覆う結界と、異様な雰囲気。存在が希薄すぎる魔物。

いくら警戒しても、かなり近づかれないと分からない。

「……迷った」

考え事してたら、迷った。考え事してなくても迷つてそうだけど……ってか、森に入ってから五分も経ってないんだけど。

「はあ……………」

自然とため息が漏れる。

適当に進むか。

止めていた足を、再び動かす。

「ッ!？」

この感じ……遺跡の奥から感じたのと同じ！

本来なら雫に連絡を入れて応援を頼むところなんだろうけど、俺の力じゃ傷付けるだけだ。

一人で、やるしかない。

気配のする方へ走り出した。

辺りは徐々に、霧が深くなっていた。

狂ったように笑って、魔物を斬り刻んでいく蓮が怖かった。逃げたかった。でも、この場から逃げるわけには行かない。護るべき人達が居るから……。帰りを待ってなきゃいけない家族が居るから。

それに、この力を使うヤツに、覚えがあつた。

元素を自由自在に操る、元私直属の四騎士の一人……………

「デイルン・グラット……………」

私とは違うから生きてないはず。

でも、これは特殊すぎて彼以外に使えるわけが無い。

一体、どうやって……………

「霧？　どんどん濃くなってる」

嫌な、気配。

狂気。さっきの蓮以上の、狂気。

怖い、逃げなきゃ。

——どこに？

分らない。そもそも、逃げ切れる気がしない。

戦わなきゃ……戦わなきゃ……！

——何のために？

何の、ため……？

護るため……うつん、違う。自分のため。自分が、生き残るため！
身体の内側から熱が溢れてくる。

「1stリミット・ブレイク……」

爆発するかのように、熱が体外へ放出された。

それはすぐに収まって、身体の中に収まった。

魔力がさっきの倍になったのが分かる。

何で、リミッターが壊せたのか、分からない。

今は目の前に居る——堕天使のような容姿をした、ゲートを倒す！

「ホープ、本気を出すよ！」

蓮の提案どおり、森の中を散策していたら、五メートル先すらまともに見えないほど濃い霧が立ち込めていた。

どうしよう。これじゃ迂闊に動けないよ。

連絡しな……きゃ……

「ッ！」

いきなり攻撃されてビックリしたけど、何とか避けれた。
攻撃が飛んできたほうを見ると、そこには、今回の依頼にあった討伐対象。空想上の存在とも言われている、最強なんじゃないかと噂されている魔物。

「……ゲエ……！」

最悪だ。

こんな時に、こいつに会うなんて。
勝てるか分からない。でも、絶対に生き残らなきゃ。

遺跡の中を魔物に襲われる事無く、只管に歩き続けた。

途中分かれ道あったけど、どっちに行けばいいのか分かった。

何でなのかは分からない。ただ、呼ばれてるような気がして、その方向を選び続けただけ。

そしたら、祭壇のようなものが一番奥に設置された広間に着いた。

「よく来た、エミスが生まれ変わった者よ」

広間に、男性の声が響く。

エミスって、誰？

「主の力……——」

広間に魔方陣が展開された。

この魔方陣、前にも見た。海上で、少女を連れて帰った男が使ってた、転移魔方陣。

魔方陣から光が溢れ、声の主が姿を現す。その人は予想通り人ではなく魔物で、倒すべき相手^{ゲーテ}だった。

「試させてもらっぞ!」

t o b e c o n t i n u e d

10話（前書き）

ああ、ぐだぐだやゝ

いつもぐだぐだだけど

戦闘ばかりです

蓮は相変わらずチートだwww

しかも観察眼や気配察知能力が優れすぎてる。

たくさんやばい事に巻き込まれた結果なんですけどね（苦笑）
その辺の話はいずれ載せるという事で

ちなみに、睡蓮の戦闘は次回

雫の戦闘は中途半端に切らせていただきます
まだ秘密を残したいので

本編をどうぞ

10話

黒い魔力弾がゲートに迫る。

ゲートはそれを黒い翼で弾き返そうとするが、空間が歪んで弾が消えた。刹那、腹部に鈍い痛みが奔った。

「ぐッ……！」

「効いてる……！」

もう一発魔弾を放った。翼が動き、弾く動作に入っただのを確認した瞬間に空間を歪め、腹部に攻撃を決めようとした。だが、当たる直前に今度はゲートの姿が消えた。

「フォトン・プロテクション！」

全身を光の障壁が包み込む。ゲートの姿が眼前に現れ、剣で障壁を砕こうと攻撃した。

剣が障壁に触れ、光が爆ぜる。全身に痛みが奔り、後方に吹き飛ばされた。

「私に、攻撃は届かないわよ……ディラン」
「……」

ディランと呼ばれたゲートは返事をしない。互いに顔を見つめあい、沈黙が訪れた。

先に沈黙を破ったのはゲート。

剣を地面に突き刺し、膨大な魔力を流し込む。雫の足元から、大量の武器が大地を貫いて現れた。

雫はギリギリで攻撃を躲すが、武器が障壁に触れた瞬間、障壁内

で爆発が起きた。障壁が砕け、砂煙が晴れると、そこには誰も居なかった。

「シャドウ・ハウリング！」

耳をつんざく不快な音が響き渡る。発生源は、ゲートを囲むように現れた黒い歪だ。

歪はゆっくりと広がり、ゲートを飲み込んでいった。

「そこは永遠なる闇の牢獄。出る方法はほとんど無い」

実際、今まで出られた事はなかった——そう付け加えて、更なる上位魔法を発動する準備を始めた。

小さな漆黒の魔方陣が黒い球体の周囲に、無数に展開されては消えた。それが五、六回繰り返された。

球体に罅が入った。罅は徐々に広がり、パリンッと音を立ててガラスのように割れた。

「集え——イーヴィル・ライトニング」

消えた魔方陣が全て現れ、ゲートの視界を闇で埋め尽くす。

魔法人の中心に生成された小さな黒い球体から、黒い雷がゲートに向かって放たれた。

逃げ場の無いゲート。だが、魔方陣の内側から姿を消した。

「背後に回っても無駄よ」

雷がゲートを追いかけ、雲に迫る。このままでは雲が自身の攻撃を受けてしまう。

雷が当たる直前、雲の周囲の空間が歪んだ。刹那、紫電が雲の身

体を貫き、ゲートに纏わり着く。

「さっきの牢獄は、あなたの身体を避雷針の様な存在にするため。違うのは、地面に雷を放出しないだけね」

雷が消え、ゲートが地に倒れ伏す。雫に怪我は一切見られない。

「――」

ゲートが小さな声で何かを呟いた。直後、ゲートの身体が光に包まれ、宙に浮かぶ。光が消えると、ゲートの身体は戦闘前と同じ状態になっていた。

『コード認証確認。能力、解放します』

雫の手に握られた二丁の拳銃から声が響く。その声は女性のもので、雫に似ていた。

「デイルン、久しぶりに見せてあげる。私本来の力を――、私にしか使えない、私の作った魔装具によって再現した、本来の力を」

銃から発せられた白と黒、二色の光が雫を包み込んだ。

黒と銀がぶつかり、金属音が鳴り響いた。

ウルはすぐに間合いを取り、紫電を纏ってその場から消えた。

「ライトニング・クロウ！」

空高くに移動したウルは、纏っていた紫電を眼下に居るゲートに向け、爪先から放出した。

ゲートが手を雷に向けて突き出すと、見えない壁に阻まれ、雷が脇へ逸れていく。

地面に着地してすぐに石針を飛ばすが、同じようにして消される。

「ハア……ハア……」

獣人形態から人の姿になり、手を膝に置いて上がった息を整える。右手に魔力を集め、地面を力いっぱい叩いた。

黒い魔方阵が森の中に大量に浮かび上がる。魔方阵から紫電や土塊、石針が飛び出し、ゲートに迫る。

雷は見えない壁に阻まれ、土塊や石針は霧散した。

さつきからウルは一撃も、食らってもいないが決める事も出来ない。接近戦はどこから取り出したのか分からない剣に阻まれ、魔法はどうやってるのか分からないが、電撃以外は全て霧散する。

「だったら……」

ウルを身体を紫電が包み込む。今までとは比べ物にならない量の紫電に、黒い髪の毛の一部が金に見える。

「防げないくらい、早くなる！」

ウルが姿が霞むように消えた。紫電が尾を引き、光の軌跡を残す。ゲートの前で姿を現し、それにつられるようにゲートは剣を振った。だが、それはフェイント。剣が触れるか触れないかギリギリの所で再び消え、今度は背後に現れた。

「ハアアアアアアアアア！！」

放たれた拳はゲートの背中にめり込み、足が地を離れた。

もう一方の手の爪が伸び、下から上に振り抜かれた。鋭い爪は翼を切り裂き、傷口から溢れ出た血に紫電が反応し、ゲートの全身を痺れと焼けるような激痛が襲う。

「ハア…ハア……これで、終わって。——グランド・ロア！」

ゲートの足元に現れた巨大な黒い魔方陣から、土塊が上空に吹き上がる。未だに紫電の攻撃が止まない中、痛みを堪えて自分に当たりそうな土塊を消し去った。

攻撃が止み、紫電も消えた。ゲートは小さく何かを呟いて、自分を覆うように球体の魔方陣を描く。魔方陣が体内に吸収され、身体が光を発する。切り裂かれた翼は消えて傷口は塞がり、新たな翼が生えた。

「う、そ……でしょ………」

光が消えて姿を現したゲートは、どこにも怪我が見られない。

ゲートが大地を一回蹴ると姿が消え、次の瞬間には背後にいた。腕を交差させ、両手に持った剣を振り抜いた。

「させるかああああああああああ！！！！」

怒号とともに、灰色がゲートを吹き飛ばした。

刀と剣がぶつかり合い、金属音を森に響かせる。

ゲートがつま先で軽く地面を叩くと、大地が盛り上がり、土塊が

弾丸のように蓮に迫る。

「ダンシング・ドール
踊る人形——風塵壁！」

大気が蓮の前に集まり、風の障壁を作ったが、土塊が当たる直前で壁は消えた。

「うあああああ！！！」

攻撃をもろに食らい、後方へ吹き飛ぶ。木にぶつかる直前で体勢を立て直し、魔法で大きな傀儡兵を一体作る。傀儡兵の手には大きなハンマーが握られており、体勢を立て直したばかりの蓮を狙っていた。

ハンマーの上に着地し、刀を納刀。振り抜かれたハンマーの勢いをそのままに、ゲートに向かって一直線に飛ぶ。

ゲートの周囲の土が盛り上がり、巨大な壁を作るが構わずに突っ込む。刀に光の粒子が纏わり、壁に向かって抜刀した。刹那、刀が爆発し、壁は粉々に吹き飛んだ。

「フォトン・スラスト！」

未だに光り輝く刀を何度も振るう。ゲートは触れれば爆発するものを防ぐわけにもいかず、只管躲し続ける。

出鱈目に振るわれる刀は木や地面に当たり、決っていく。遂に躲ききれなくなり、剣で攻撃を防いだ。直後、爆発音の中に何かが碎ける音が響き、刀身が地面に落ちた。

「手前の力は大体把握した。ダンシング・ドール
踊る人形」

手を刀に翳し、刀身のあった長さまでゆっくりと動かしていく。

すると、地面に落ちた刃が切先から消え、刀が元に戻った。

「この魔法とほとんど同じだ。違うのは光と人の手にしてるものを操れないって所か？」

敵の目の前で、戦いの最中に分析した事を話す。

「手前が喋れる事は分かっただけだな。これ以上戦うと理性を失っちまいそうなんだ」

「……前者は当たりだ。人が手にしてるものとか関係なく、俺は元素を操れる」

互いに得物の切先を向け合い、警戒を解かない。

「俺はお前を殺さなければならない。世界に大きな歪みを生み出したお前を。お前の所為で、リディアは三年も早くこの世界に来た！エミスの両親が死んだ！！お前だけは絶対に殺さなきゃならないんだ！！！」

間合いを一気に詰め、蓮に斬りかかった。刀で攻撃を防ぐと、ゲートの顔が驚愕に染まった。

「何故刀が消えない！？」

「さっき直した時に光の粒子を混ぜていた。光の粒子は元素じゃねえから手前エの力はもう、効かねエ！」

剣を弾き、姿勢を低くして懷に潜り込む。大地が隆起して蓮を迎撃しようとするが、途中で止まった。再び驚く相手を刀で斬る。だが、皮膚は硬く傷が浅い。

「何でだ！？ 何で力が使えない！！？」

「元素を操れるのは手前だけじゃねえってこつた！！」

刀を袈裟、横に振り抜き、最後に突きを放った。ゲートが吹き飛び、ある程度離れた事を確認して無数の光の槍を放った。

「フォトン・ランス——チェイン・エクスプロージョン！！！」

「ぐあああああああ！！！」

全ての槍が爆発してゲートを更に吹き飛ばす。しかし、それだけで終わる事はなく、魔力の残滓が更に爆発した。

攻撃が止み、爆煙が晴れて中から現れたゲートは腕が取れていた。ゲートは表情を変える事無く、自分の両側に二本の剣を浮かせる。

「ソード・ブラスト」

二本の剣が弾丸の如く蓮に迫る。それをギリギリで躲すが、周囲から逃げ道を塞ぐように、無数のダガーが自分に迫っているのに気が付いた。

刀を振り回して致命傷は避けているものの、身体の至る所に切り傷が出来ている。徐々に蓄積されていくダメージに身体が耐え切れず、動きが鈍り始めた。大きく横に薙ぎ払った時の遠心力でバランスを崩し、一部のダガーが突き刺さる。

「ぐあっ！」

腹部から血が大量に零れ落ちる。血で赤黒く染まった地面と、周りで待機している無数のダガーを見て、顔色が絶望に染まった。

（嘘だろ。ここで死ぬのかよ………ハハ、それもいいかもな。元々

生きてちゃいけねえんだ……)

諦めたのか、俯いて力を抜いた。刀が手から零れ落ちた。

——逃げてるだけじゃないの？

脳に直接声が響く。夢の中で二度聞いた声。

(うるさい)

——反論するって事は、凶星？

(黙れ！)

——逃げて、何を手に入れられる？

(黙れつつつてんだろ！！)

——逃げてちゃ何にも手に入らないよ。“護りたいモノ”だって護れないよ。

(ッ！！！)

——生きてるのが怖いのも分かるよ。誰かの傍に居るのが怖いのも分かる。だけど、それ以上に——。

少し間を置いて、再び声が響いた。

——死ぬのが怖いんですよ。

当たりだった。死の感覚を目の前にして、身体が恐怖で震えている。ダガーが再び動き出した。何もしなければ、数秒後に無数のダガーが全て突き刺さって死んでしまう。

——ほんの少しの間に、随分変わったよ。これも、君の護りたい存在のお陰かな。あのとても優しい彼女なら、君が死んだら絶対に

悲しむもんね。

傷ついて欲しくないから護る。悲しんで欲しくないから死ぬ事を恐れる。傷付けたくないから、遠ざけ、死を選んだ。

——キミだったら、この土地に仕掛けられた術式には気付いていたはずだ。それでもあえて言わなかったのは、彼女から距離をとるためだ。暴走して殺さないために。傷付けないために。

「ああ、そうだよ！　その何が悪い！！　戦いになると自分が自分じゃなくなるんだよ！！　そうになったらみんな傷付けちまう！！　！　護りたいものを護るためには、こうするしかねえんだよ！！！！」

自分の気持ちを、言葉にして一気に吐き出す。それでも言いたい事はまだたくさんあって。しかし、それを言っている時間はない。落とした刀を無視して、白い光と黒い光を集めて灰色の長刀を作り出した。上段に構え、力いっぱい袈裟懸けに振り抜いた。魔力の斬撃を飛ばし、前方にあったダガーを全て弾き飛ばす。

長刀を消して落とした刀を拾い、急いでダガーの包囲網から抜け出した。

「最初はいつが嫌いだったよ……いくら無視しても毎日挨拶してくる。ほっとけばいいものを。次第に挨拶を返すようになって、だんだん、自分の内側が変わっていくのを感じた。でも、全く変わらずに残っているのが……、戦いになると全ての感覚が狂う事。一番変わって欲しいものが変わらない。相手が倒れるまで、俺は狂い続ける……」

追いかけてくるダガーを無視して、その場に立ち尽くす。顔は俯いていて表情を窺えないが、手が震えている。

「はあ……。手前のせいで覚悟が揺らいじゃねえか。こうなったら生き続けてやるよ！　どんなに薄汚れた存在になってもなァ！！」

身体の内側から熱いものが込み上げてくる。頭に浮かんだ鍵パスを声には出さず、心で発した。

——魔力第一段階解放。コード・Gray発動。

魔力が溢れ、それに触れたモノは全て、存在が消滅した。

髪の色が灰色に染まり、手に持っていた刀が、心臓が一定の速度で鼓動を刻むように、脈打ち始めた。

「この力は加減できねエ。ま、手前は偽者フェイクだから問題ねえよな？」

「やはり、氣付いていたか」

「俺にだけ本物オリジナルに近い力を持った偽者できたようだけど、やっぱり存在が希薄だ。他の魔物と同じだった。他の奴は騙せても、俺は騙せねエよ……」

刀を上段に構える。しっかりと狙いを定め、膨大な魔力を注ぎ込んだ。

「——虚空衝破斬！！！」

「レイピア・ブラスト——貫！！！！！」

一方は虚空をも切り裂き、衝撃波で全てを破壊していく灰色の斬撃。

もう一方は、刀剣類の突きの威力を追い求めた末に生まれた細身のレイピアに、貫通力の高い銃器の回転力を加えた、全てを刺し貫く銀色の剣シールド。

だが、偽者の力は本体に近いと言っても、力を抑えた状態のにという事だ。普段から力を全開状態にしている周囲に大きな影響を

与えてしまう。ただでさえ偽者は本体に劣るため、一段階封印を解除して魔力総量が増えた今の蓮には、力では遠く及ばない。

点の攻撃と線の攻撃では点が勝つが、それは力の差が大してなく、ほとんど拮抗した状態でこそ起こる現象。結果は互いに分かっていた。

「俺の負けだな……。歪みの元を断てば、これ以上世界が混乱しないで済むと思っていたのにな」

灰色の斬撃は弾丸の様なレイピアを一瞬の拮抗も無く消し去り、ゲートの身体を右肩から腹まで完全に切り裂いていた。

傷が再生する事は無く、傷口から皮膚が砂のようにボロボロと落ち始めていた。

「今更俺を消したところで現状が変わるわけじゃねエだろ。歪みが絶対に直るという確証もねえ。起こっちゃったもんはしょうがねエんだ」

「フツ……。お前の言うとお、り……。なの、か……。も……。な……。……」

全身が砂になり、偽者のゲートが一体消えた。

「ここから一番近い雫は……。何か知らねエけど、魔力増えてるから大丈夫だろ。そうなるとウルか。ああ、いつてエ！ ウルの方終わったら、雫に怪我治してもらわねえと」

魔法で出した水で傷口を洗い、氷で止血する。

刀を鞘に収め、灰色の軌跡を残してその場から消えた。

魔力が完全に空になって負けを覚悟した時、髪の色と雰囲気が変わった蓮がウルとゲーテの間に割って入り、攻撃を防いだ。

「蓮！」

「ボロボロだな、お前」

「蓮にだけは言われたくないよ」

「それでも、こいつよりかなり強い偽者と戦ったんだぞ。このくらいで済んだ事を褒めてほしいな」

話している最中にも刃に魔力を籠め、現段階で最強の一撃を放つ準備を整える。

「虚空衝破斬！」

灰色の斬撃がゲーテを飲み込み、大地を数十メートル抉って収まった。

ウルは、自分がどんなに頑張っても一撃も決められなかった相手を、たった一撃で消し去った事に驚き、同時に悔しいという思いが心を蝕んでいた。

t o b e c o n t i n u e d

10話（後書き）

蓮の能力、コード・Grayについて

単純にGrayは色名です

これは能力を発動すると髪の色が灰色になるからという、なんとも分かりやすい名前です

ですが、能力の秘密はこれだけにあらず

これ以上の説明は出来ません

蓮が歪みの原因というのとの関係がありまして、ネタバレになってしまうから

偽者ゲートの力

雫とウルが戦ったのは、本体と比べて半分の実力を持ったモノ
蓮が戦ったのは、五分の四の実力を持つものです

ゲート本体は、何千年という歳月を生きているため、魔力量が現在の雫達の三十倍はあります

小さな島程度でしたら全力を出さなくても消し飛ばすほどです

どう考えても規格外キャラです

こんなキャラと戦う睡蓮は生きて帰れるのか！？

普通に戦ったら死にます（笑）

ちなみに、自身の力の六倍もある偽者を倒した蓮も規格外です
しっかりとした理由はあるんですが、これもネタバレになってしまうので

では、次回もお楽しみに^^

11話（前書き）

これから短めにして早く更新していこうと思います。

11話

遺跡の最奥にある広間で対峙するゲートと睡蓮。

にらみ合う事数分。痺れを切らした睡蓮が先に動いた。

両腕に剣の形をした氷を纏わせ、足の裏から魔力を放出して一歩で距離を詰める。

「全ての元素は私の支配下にあり——昇華せよ」

腕を振りかぶり、攻撃の動作に入った瞬間、氷が蒸発した。

一瞬驚いたが、勢いがつきすぎて途中で止める事は出来ず、紫電を刃の形状に固定して腕に纏わせ、振り抜いた。

ロック・ウォール
「岩壁」

即席の魔法にしては互いに魔力密度が高く、破壊力と防御力は互角。結果、お互いの魔法を打ち消しあった。

睡蓮は即座にその場を離れ、いつでも攻撃を避けられる体勢をとった。

「反応速度は合格点か。魔力運用はまあまあだが、密度を一気に高める事は出来るようだな」

「戦闘中に、敵の評価を口にして良いの？」

「主の力を見るのが目的だ。もっと強くなってもらわなくてはな」
「そう……なら……——」

睡蓮とゲートの髪の毛が逆立つ。空気がピリピリし始め、次第に身体に痛みが奔るようになった。

「サンダー・フエンス
電気の網」

睡蓮が言葉を呟いた刹那、ゲートの身体に一瞬だけ、焼けるような熱さと痺れるような痛みが奔った。

だが、今のゲートに攻撃としてその魔法は通用しない。長い時を生きてきて知能を持つ魔物と、十数年しか生きてなく、つい最近魔法を知った者では、経験に差がありすぎる。

「カズムル
神速……」

魔法を発動して数瞬後、睡蓮の姿が消えた。

ゲートの背後に回り込み、紫電の剣で斬ろうとする。すぐに気配に気付き、振り向きざまに剣を振るった。だが、再び姿が消え、背後に回られていた。視界が開け、目の前には紫電の槍が迫っている。魔法を発動しようにも、攻撃の速度が速いのと距離が近すぎて間に合わない。

「フエイント・スラッシュ！」

魔法の発動を諦めて槍を迎撃し、背後から斬られた。紫電が剣を伝って、身体を焦がす。一瞬で生成したものにしては威力が高かった。

「スピードもパワーもその年にしては十分合格だ。特に女兒は男児に比べて力が弱い子が多いからな」

ゲートの身体にダメージの痕はない。

——やり辛い。戦いたくないのに戦って、実力を評価されるなんて、嫌。分かっている。そんな事言っちゃいけないって……。でも、戦いが嫌いなのは変わらない。それでも戦わなくちゃいけないから。

みんなを……、大切な人達を護るためには、力が必要だから。誰に対しても優しすぎるって、自分でも思ってる。戦いにおいては短所だって分かってる……！でも、これが私の長所。誰かが言ってくれた。『誰に対しても優しく出来るのは凄い事』だって。『これは貴女の長所。誇りに思いなさい』って。でも、今のままじゃダメ。誰かを護るためには……。

「割り切る事も必要……」

ゆっくりと目を閉じた。感情に流されないために、一度心をリセットする。

体内の魔力の流れを細かく感じ取り、全身にくまなく巡らせる。紫電を使った身体強化ではなく、魔力を制御して不安定な状態を安定させる事で、本来の力をフルに発揮させる。

「今度はこっちからいくぞ！ ソード・レイン」

数十本もの剣が睡蓮の頭上に生成され、降り注ぐ。

一見ランダムに見えて、実は計算された動きをしている。剣と剣の間には微妙にタイミングをずらす事で隙間を創り、ギリギリ一人が入れるようにしているのだ。

睡蓮は目を閉じる事で余計なものを見ないようにするが、風きり音が死という恐怖を生み出す。

——大丈夫。間違えなければ攻撃を全て躲せる。

恐怖を払拭し、一本、また一本、剣を躲す。

剣を弾けば計算されつくした動きが不規則になり、自分を苦しめる事になる。ここはただ、只管躲し続け、攻撃が止むのを待つしかない。

ライトニング・スフィア
「雷の球体」

最後の一本を見事躲し、雷の球体を放った。進めば進むほど大きさが増す魔法に、ゲートは不思議に思った。球体は部屋中を飛び回り、その大きさは遂にゲートの倍になった。

睡蓮は自身の周りに転がる剣を拾い、その切先をゲートに向けた。

サンダー・ブレード
「雷の剣」

バチツ——と、剣から紫電が迸った。紫電の大きさは更に増し、剣と睡蓮が一体化したように見える。

部屋全体に張られた電気の網が視認出来るほど太くなった。それによって、今までの魔法の不思議な現象の答えが出た。

「電気の網による身体強化と雷系魔法の強化。最初から全て考えて行われてたって事か。ククク……ハッハハハハ！！ 合格だ！！ 最後にその力、俺にぶつけろ！！！」

電気の網が消え、球体は睡蓮に近づいていく。剣の腹で収縮した球体を薙ぎ飛ばし、睡蓮の姿が消失。刹那、ゲートの周囲に三本の光の軌跡が出来、睡蓮はその背後で剣を振りぬいて止まっていた。

「やっぱスゲエな、エミス……」

ゲートが呟いた直後、眼前で雷球のエネルギーが爆散した。

ディランを倒して、私は本人の分身から話を聞いていた。何でこの時代で生きているのか。どうやって生き延びたのか。その姿は何なのか。

全て、一つの魔法と契約によるものだった。

「あの時はリディアが死んだ後、俺達の契約は解除された。……はずだった」

四騎士は、一生を私の下で過ごす事を誓った存在。私の力を分け与えた、眷属だ。

ディランに与えたのは魔力だけだったのに、眷属の中でも一番強い存在で、私の右腕だった。

私とエミスから力を受け取った者は、私達が死ぬまで寿命がある年齢で止まる。その年齢は人それぞれだが、それ以降は不老だ。私達が死なない限り一生生き続ける、ある意味不老不死とも言える。私達の死は同時に、契約の解除を意味する。

それがはずだったと言うのは、なんで？

「リディアが死んだ直後、エミスが俺達と、ある契約を交わした。それは……」

言葉が途切れた。そこから先を言うのを、迷ってるようだ。

それがどんな契約なのか知りたい。私との契約も残ってる状態で更なる契約。出来ない事じゃないけど、契約内容によっては、彼の肉体と精神に相当の負担になるはずだから。

「『五つの遺跡と、その最奥にある祭壇を護って。いずれ、私の生まれ変わりが訪れるから』。最初は冗談かと思った。でも、エミスの真剣な顔に、何も言えなくなった。契約は無事完了」

五つの遺跡——、一つは目の前にある。残りの四つはこの世界のどこかにあるのね。

「祭壇に封印された力は、エミスの眷属の魂だ。エミスの眷属は四騎士と別に、兄を含めた五人が居るのは知ってますね？」

「ええ」

「その五人の魂が、一つ一つ解放されてエミスを手助けする。魂が解放された遺跡の守護者は、本来の主である、リディアの力になる事を、契約の条件に入れてもらってます」

彼らは進んで、私の力に……。でも待つて。それじゃあ、一人足りない。私の眷属は四人だけ。もう一人は、誰？」

「これ以上説明できません。俺の役割はここまです。奥へ進んでください」

「待つて。私の眷属以外に、もう一人遺跡の守護者がいるわよね？」
「それはお楽しみという事で」

ディランの分身は、霧になって消えた。

「雫、ホープ！」

「蓮！ ウル！ 無事だったのね」

「蓮のお陰でね」

「俺は無事じゃないんだけど」

蓮を見ると、腹部からかなりの血が流れていた。どう見ても傷口はかなり深くで、出血多量。立ってるのもやっとなはず。

「すぐに直すね」

「頼む」

ホープを呼んで魔導書になってもらう。魔力を流し込んで、二番目に強力な回復魔法を発動した。

蓮の傷口はみるみる塞がっていつて、十秒もしないうちに完全に塞がった。でも、今まで流した血だけはどうする事も出来なくて、少しふらふらしている。

「睡蓮の様子、見に行こうぜ」

「いいけど、船長さん達はどうするの？」

「わしらはここで待つてゐるから行つていいぞ」

「でも、また魔物が襲つてきたら……」

ウルが心配してるけど、その事については問題ない。あの魔物はデイルンが元素を集めて作つた傀儡。魂無き戦人形だから。

「あれはゲーテが作つた傀儡だから大丈夫だ。行くならさっさと行くぞ」

蓮の後に続いて、私達は遺跡に踏み込んだ。

「……ス…エ、ス」

誰かが私の体を揺らして呼んでる。誰が？

「エミス！」

ボーっとしていた意識がだんだんハッキリしてきた。ゆっくりと目を開けると、目の前にはゲーテの姿があった。

「よかった、気が付いた」

ゲーテが安堵の息を吐いた。
そんな事はどうでもいいの。それより……、

「エミスって、誰？」

私がそう言った瞬間、空気が凍りついた気がした。

12話

睡蓮は何も覚えていない。

その事実にも、ゲートは固まったまま動かなくなった。

信じたくなかった。冗談だっと思って思いたかった。だけど、次の睡蓮の一言で淡い期待は崩れ去った。

「私の名前は“花咲睡蓮”だよ」

今思えば最初から変だった。

もし、記憶がある状態でここに来たのだったら、ちゃんと挨拶をしたはずだ。それが無かった時点で気付くべきだった。

「奥にある祭壇に行け」

「？ 分かった」

船長の依頼内容とは違うが、戦う意思が無いのであれば戦いたくない。それに、戦っても絶対に勝てない。

睡蓮は言われたとおりに祭壇に向かう。

「睡蓮！」

祭壇の前に着いた時、ゲートが睡蓮を呼び止めた。

「そこに立てばこの封印が解かれ、お前は力の一部を取り戻す。だが、本当の試練はその後だ」

「どういう事？」

「これ以上は言えない。そういう決まりなんだ」

「そういう事なら」

本当の試練というのが気になったが、諦めて祭壇の上に立つ。

祭壇には不思議な模様が刻まれており、睡蓮が身に着けているネツクレスが光つたのと同時に模様から光が溢れた。模様が宙に浮かび上がり、ネツクレスと同じ高さで止まった。模様は凄く速さでネツクレスに吸収されていく。

ネツクレスに嵌め込まれた真ん中の青い石の色が深まり、右の黒い石が黄色に輝いた。同時にゲートの身体から淡い光が発せられ、姿が透明になっていく。

（後は頼んだぞ、睡蓮と雫の仲間……）

——ヴオォォォォォォォォォォ

睡蓮の背後に、四足歩行の化け物が現れた。前足と後ろ足は氷に覆われ、全身に紫電が奔っている。額から二本の角が生えており、大きな尻尾は軽く振っただけでも強力な風圧を生み出す。全身の毛はふさふさしているように見えるが、一本一本が針のように細く鋭い。

気付いた時には前足が振り上げられており、防ぐ事は出来ない。

「いやああああ！！！！」

「ソード・ブラスト！」

「ダークネス・ブラスト！」

剣と黒い球体が弾丸のように放たれ、化け物の前足を弾く。

「睡蓮！！」

「ああ、血ィ流しすぎた……」

「ちよっ！ 危ないから！！ 戦えないんだったら休んでなよ！！」

「！」

雫とウルは睡蓮の下に駆け寄り、蓮は倒れそうになったところをホープに助けられた。

ウルが睡蓮を抱きかかえて下がり、雫は二丁の拳銃の銃口を化け物に向ける。

「ウル、蓮、雫……ありがとう」

「礼はいいよ。それよりも……」

「あいつを倒すのが先だ」

雫が一人で対峙している化け物を見る。さっきまでの戦いでかなり魔力を消耗しているこのメンバーでは、勝つのが難しいほど強い敵だ。

ふらふらしながらも刀を地面に付いて立ち上がった。

「五分だけ、戦闘をかなり有利に出来る魔法がある」

「本当に！？」

頷いて返事をする。だが、その魔法は代償がでかい。

「合図をしたら一気に攻めろ」

「分かった」

一つ、深く息を吐く。吐ききって化け物を見た瞬間、空気が一変した。まるで時の流れがゆっくりになったかのように、蓮には呼吸から筋肉の動きまで見えていた。

「化け物……」

化け物が蓮の方を向いた。灰色の瞳に睨みつけられた化け物は、意思のように固まって動かなくなった。

「お前は五分間、俺らの姿を捕らえる事はない」

地面に付いたままの刀が、大きな音を立てて砕ける。それを合図に、みんな一斉に攻撃を仕掛けた。

雫の放った弾丸は足に命中し、ウルのパ撃と睡蓮の剣撃が化け物の額に直撃する。だが、傷一つ付かない。弾丸は氷に吸収され、爪と剣は毛に阻まれた。

「嘘……」

「勝ち目、ないよ」

雫とウルから戦意が失われる。いくら姿を捉えられなくても、がむしゃらに暴れまわれば攻撃は当たる。

「ソード・レイン！」

大量の剣が降り注ぐ。だが、全て毛に防がれる。

「チツ。レイピア・ブラスト——貫——！」

一瞬で生成された細く鋭いレイピアが、化け物の額にぶつかって砕ける。だが、一発だけでは終わらず、何発も放ち続ける。魔力の限界が来ても無理矢理にでも搾り出して。

「はあ……はあ……。いつまでもボーっと突っ立ってんじゃねえ！ 戦う気がねえんだったらとっとと逃げろ！！ 俺らにお前らを護りながら戦う余裕はねえぞ——！！」

「っ!？」

徐々に蓮の魔法の発動速度が遅くなる。ホープは蓮と同じ場所に上手く光の弾丸を撃ち込んではいるが、聞いてる様子が無い。蓮が突然攻撃を一点に絞った事で何かあると確信したつもりだったが、今では続ける意味があるようには思えない。

だが、そんな考えもすぐに吹き飛んだ。化け物の額から飛び散った少量の血によって。

「効いてる!!」

「まだだ……。化け物!」

化け物は蓮の姿をハッキリと捉えたかのように、蓮の居る場所を見つめていた。まだ、最初に掛けた魔法が解けたわけではない。

「お前は今から二分間、絶対に身体を動かせない」

蓮が言い放った瞬間、魔物は呼吸すらもせず、ぴたりと止まった。

「何をしたの？」

「最強の催眠術で化け物の時を止めた。逃げるなら今しかねえぞ」

「み、みんな早く逃げよう!」

「うん」

蓮の一言で、雫とウルは遺跡の出口へ向かって走り出す。それに続いて睡蓮とホープも走り出した。戦っても勝てないと分かっているのだ。だが、蓮だけは動かない。逃げなきゃ危ないって分かっているのに、一人だけその場に突っ立ったままだ。

「蓮くん! 早く逃げようよ!」

「先に行つてろ」

刀を支えに何とか立つてゐる状態で一人残ろうとする蓮に、睡蓮は逃げ出せない。

「だつたら私も！」

「邪魔なんだよ！」

「ッ?!」

「これから使う魔法は制御しきれねえから、先に逃がすんだ！」

「……………ぜったい……………」

でも——と言おうとした自分の想いを、押し殺した。その代わりに――、

「絶対戻つてきてよ！」

「そのつもりだよ」

約束を交わして、睡蓮は出口へ向かつて全力で走る。

「さあて、と」

刀を肩に担ぎ、ポケットに片手を突っ込んで化け物を睨みつける。

「驟雨、好きに暴れろ」

刀が光を発した次の瞬間、化け物の角が一本、大きな音を立てて地面に落ちた。蓮はその場で刀を振り切った後の様な姿勢になっている。

「ほんと、あいつらがいなくなつて助かった」

ボソツと呟いた直後、化け物の背後の壁が吹き飛び、大きな穴が開いた。蓮が刀を一振りすると魔物の前足が付け根から落ち、再び壁に大穴が開く。そこからはただの虐殺だった。刀が振るわれるたびに魔物の身体の部位が一部斬れ落ちて壁に大穴が開き、また斬れ落ちて大穴が開く。

蓮が「十分だ」と呟くと、右腕が動いて刀はゆっくりと鞘に納まる。まるで、蓮の右腕だけが刀の一部のような感じだ。

「制御できれば問題ねえんだけどな」

遺跡は大きな音を立て、崩れた。動かなくなった化け物と蓮を閉じ込めて。

t o b e c o n t i n u e d

12話（後書き）

戦闘に楽に勝ってるように感じるでしょうが、ギリギリです。

蓮の催眠術がなければ全員死んでいた戦いです。

読んでて、何で最初から化け物の動きを止めなかったって思うでしょうが、そういう魔法にはそれ相応の過程が必要なわけで、その時間が魔物に自分たちを認識させなかった魔法。

それを使えば勝てると思ったけど敵はかなり強く、みんな戦意を徐々に失っていったってわけですね。

最初に弾き返せたのは認識してなかったからですな。

そのうちあの化け物の設定が明らかになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6844s/>

Starry site

2011年11月30日18時45分発行